
ラスト国～奪われし玉～

雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスト国（奪われし玉）

【Nコード】

N9824A

【作者名】

雪

【あらすじ】

空に浮かぶ二つの島。それは、今は存在しない魔女とドラゴンが身をひっそり隠しながら住んでいた。平和な世界をきづいてきた二つの国。だが、勘違いのすえまねいた悲しい結末……。たった一つのできごとで、すべてが変わってしまった。さあ、主人公とともに悲しく、けれど心暖まるファンタジーの世界へ一緒に足を踏み込んでみてください☆

第一章前半

昔々あるところに、空に浮かぶ島が二つあった。一つの島は、魔法使いが住むラスト国。もう一つの島は、ドラゴンが住むスカイスネイクと言う国だった。とても仲のよいこの二つの国は、いつも力を合わせて生活をしていた。霧がかかる朝、空を飛び交うドラゴンと一緒に、魔法使いの子供達は小さい箒にまたがって、鬼ごっこをしていた。

地上にいる母親は微笑みながら、空にいる子供達に手を振っている。茶色や白家が、城を守るかのようにしつたくさん建てられていた。透明な城は中にいる人達をも見え、とんがっている一番上の塔には真っ白な砂がはいった大きな砂時計が魔法で動いている。そこに、子供の少女が窓を開けて、今日も平和な村の人達を見下ろしていた。「いつも、わしらのミニドラゴンが世話になっているの」
頭上からしゃがれた声が聞こえた。少女は、クスツと笑い上を見上げた。

年老いたドラゴンが、大きな翼をはためかせ浮いていた。
薄黒い鱗が太陽にキラキラと反射している。

少女は窓から身を乗り出し、大きく息をすった。

とても冷たく、自然の匂いを運んでくる風が少女は好きだった。

「あんなにも小さなドラゴンが、大人になればベギスみたいに大きくなるのよね。今が一番楽しいときだわ」

「ハッハッハッ。アルト、お前はまだ子供のくせに大人みたいなことを言うのじゃな」

少し寂しげな感じで、ベギスと呼ばれた年寄りドラゴンは、爪があたらないように大きな手で、アルトという少女の頭をなでた。

「アルト、お前はまだ子供じゃ。いつもいつも城に閉じこもって何が楽しい？子供は子供らしくしっかり遊ばんか。それが子供の仕事なんじゃぞ。あいつらを見てみる」

空の上で遊んでいるミニドラゴンと子供達を見ながらベギスが言った。だが、アルトはその光景を見ようとはしなかった。

「私はこの国の姫なの。皆を守らなきゃいけないの。魔法だって、もっともっと覚えなきゃいけないし。母様も父様も、私に期待してください……それに」

ギュツとアルトは両手を握り締めうつむいた。

「魔法の力が衰えると、この島二つとも空に浮けなくなって落ちてしまうって母様が言ってた。今は母様の力でこの二つの島はたもってるけど、もし母様がいなくなって、島二つを支えるのは私。もし私が失敗したら……村の皆や……貴方達も死んでしまう。だから今遊んでいる暇はないの」

涙目になっている瞳を、アルトはローブの袖でふきとった。

ベギスは、長い爪で自分の頭をかくと、グルツと体をひねらせ、アルトの目の前で頭を下げた。

「お前の力で、島がたもてなくとも、わしらがいる。なんのためにわしらがいるのじゃ？ わしらの血かて、魔法使いに負けないぐらい威力はあるのじゃ」

優しいベギスの言葉に、アルトは気持ちが少し楽になったのか、拭いても拭いても涙が流れてきた。

「アルト。少しだけこの年老いたドラゴンについてきてはくれぬか？」

涙でいっぱいになっている目を大きくしてアルトは顔をあげた。

「で、でも。もう少ししたら、執事が来て魔法の勉強をしなくちゃいけないの。さぼったら父様に怒られてしまう」

だが、ベギスはアルトの言葉を見無視し、なかば強引にベギスは下げている頭をアルトの足にひったかけ、背中に乗せた。

ベギスの鱗は硬く平行線だったため、アルトはあたふたとつかめる場所を探した。

落ちる！と思ったとき、タイミングよくベギスが翼を広げたので、

アルトは急いでその翼をつかんだ。

「父様には帰ったら、わしが言っておこう。たまには、娘を息抜きさせろとな」

しゃがれた声で笑いながら、ベギスは後ろにいるアルトにニッと笑いかけた。

アルトはさっきまでの不安な気持ちがふきとび、ベギスに笑い返した。

翼を大きく動かし、すごい速さでベギスは飛んだ。

城はどんどん小さくないなり、わずかに執事の姿がさっきまでいた窓に顔をだして何かを叫んでいたが、アルトには全然聞こえなかった。耳元で風がきる音がし、鬼ごっこをしていたミニドラゴン達もあっという間に抜き去ってしまった。久しぶりの外に、アルトはわくわくが止まらなかった。周りをキョロキョロしていると、急に森の中へとはいっていった。

「ベギス！ いったいどこまで行くの？」

「もうすぐつくさ！」

とベギス。

森から抜け、芝生が広がる場所につくと、ベギスはゆっくりと着地した。右足をおりたため、背中からアルトを下ろした。緑や黄緑がまじった芝生は、誰かが刈っているかのように綺麗にそろっている。と、真ん中に一つだけ大きな大木がたっていた。ここは。アルトは以前ここに来た覚えがあった。

「お前と出会ったのが、この大木の下じゃよ。覚えいるかの？」

「ええ、覚えているわ」

魔法の勉強に嫌気がさしたアルトは、あるとき城を抜けだし、この森にはいつ迷子になってしまったのだ。大木でうずくまっているアルトを、ベギスが見つけ城までおくってくれたのだった。あれからと言うもの、ベギスは毎日のように私に会いに来てくれている。

「あのとき、どうして魔法をつかわなかったのか、わしは不思議でたまらなかったわい」

意地悪げにベギスは言った。

恥ずかしそうに、アルトは大木に近付いた。

「だって、あのとき杖もなにもなかったから。杖無しでできると言ったら治療ぐらいだったもの」

大木はあの頃とかわらず、強く太く生きていた。アルトはその大木に手をそえ、額をあてた。大木の脈がなぜか弱っている。

「もうすぐ、この木も死んでしまうんじゃないよ」

ベギスは感づいたアルトにそう言った。

「だから、ここに連れて来てくれたの？」

寂しげにアルトは大木を見上げた。上には巣作りをしている鳥達がいた。

「そうじゃよ。明後日には、森のグリフがこの木を切りに訪れる」
ベギスと初めてあった思い出の場所がなくなってしまう。アルトは、両手を重ね大木に触れ小さく息を吸うと目を閉じ呪文を唱えた。治療の呪文をつかえば、もしかしたら……もしかしたら助かるかもしれない。

「やあーアルトや。久しぶりじゃの」

耳に入って来た声は、あきらかにベギスの声ではなかった。大木の声だ。もう少し頑張つて。私が治してあげるから。心のなかでアルトは大木にといかけた。

「無駄じゃよアルト。これも運命。アルトや、運命を魔法なんかでかえてはいけない。だから、その手を離すんじゃない」自分の意思ではないのに、アルトの手がしだいに大木から離れた。これも、大木の力なのだろう。アルトは呪文を唱えるのをやめた。

「ベギスよ。アルトに会わせてくれてありがとう。礼を言うよ。あんなにも、小さくて怯えてわしにしがみついていた子が、こんなにも大きくなっている所を見れてうれしい。もう心残りはない」

「礼などいらぬ。静かに眠れ。また違う形で、お前に会えるのを祈っている」

とベギス。

一瞬アルトは、大木が笑っているように見えた。

眠ってしまったのか、もう大木の声は耳に聞こえてこなくなった。と、大木の下にキラキラと光るものが二つ落ちていた。

氷でできた、ペンダントだ。

アルトは、しゃがみこみペンダントを手にした。

なんとなくアルトには、わかっていた。

大木の最後の気持ちだと。

アルトとベギスは、大木から貰ったペンダントを身に付け城へと戻った。

城に戻ると、やはり父様が怒った顔でまっていた。

父様がズカズカと歩いて来たので、おもわずアルトはベギスの後ろに隠れた。

ベギスは父様をなだめ、なんとか怒られないですんだ。

部屋に戻り、アルトは窓をあけた。夕日が沈むなか、ベギスがミニドラゴンを連れて自分の国へと帰っていく姿をアルトはずっと見ていた。これからも、何ごともなく幸せな日々が訪れますように。首にぶらさがっているペンダントを握り締め、アルトは祈り窓を閉めた。そう、誰かが国に影をもたらすともしらずに。

第一章後半 1

何かいやな予感がしてアルトは目を覚ました。しかし、そこは自分の部屋ではなく、ドラゴンの国スカイスネイク城の門のまえだった。「どうなっているの？」

よく見るとアルト、寝巻のままだった。

夢？アルトはそう思った。

そのとき、兵士のドラゴンが門から出て来た。なぜかアルトは、近くのしげみに隠れた。ドラゴン兵士はあたりをきにしながら森へと足を踏み込んで行った。なんでこんな時間に？誰にも見られないように、アルトは足音をたてずドラゴンについていった。どのくらい歩いたのだろうか。奥の方から話し声が聞こえてきた。

「持ってきました」

兵士の声だ！アルトは足早に草を掻き分けた。月の明かりが二つの影を照らしている。体を丸め、アルトはその二つの影をじっと見た。何をしているのかしら？兵士がそわそわしながら、ポケットのなかから何かを出したのが見えた。それを、もう一つの影に渡した。

「ご苦労様です」

かすれた声が聞こえた。

「では、約束どおり王様よりも強い力をわたくしに、授けてください」

ひざまづいた兵士に、もう一つの影は後ろを振り返り帰ろうとした。

「ちょ！まってくれ！」

ドラゴン兵士の声が裏返った。影がピタッと足を止めた。ドラゴン兵士は焦っているようだった。

「話が違うじゃないか！それを盗んできら、わたくしに力をくれると」

「魔女をあまり信用してはいけないよ。ドラゴン君」

薄気味悪い声とともに、ドラゴン兵士の悲鳴が森中に響いた。

アルトは驚いて耳をとじた。こ、殺されたの？でも、こんな夢よ……ただの夢にきまつてる。夢とはいえ、アルトは恐怖のあまり体が震え出した。草を踏む足音が、だんだん遠ざかる。きつと、あの影に違いない。後をつけようとおもったが、アルトは動く事ができなかった。そのとき、何人もの足音が後ろから聞こえてきた。

「なんだったんだ今の声は！」

「わからない。だが、魔女とおもわれる匂いがする」

「魔女？なぜこんなところに魔女の匂いが。ここには、無断で魔女ははいってこれないはずだ」

しだいに話し声が近付いてくる。アルトは震える体を、なんとかおこし後ろを振り返った。さっきおこった事を話さなきゃ。暗闇のなかから、剣をもったドラゴン兵士6匹が現れた。アルトは大きく手を振った。

「ここよ！はやく助けてあげて！」

だが、ドラゴン兵士はこちらを見てくれない。と、一匹のドラゴン兵士が倒れている仲間を見つけた。

「おい！いたぞ！ここだ」

走って来るドラゴン兵士が、目の前にいるアルトの体をすり抜け、死んでいる兵士にかけよった。えっ？どうして今……。もしかして、私が見えないの？耳が片方ないドラゴン兵士は、死んでいる兵士を抱き抱えた。

「死んでる！殺された」

「おい！ここに魔女の杖が落ちてるぞ」

6匹の兵士が騒ぎ出した。

「魔女が殺したっていうのか……ラスト国の者が」

アルトは、この場所にいたくなかった。

そんなはずがない。

私の国のものが、ドラゴンを殺すはずがない。死んでいる仲間を背負い、ドラゴンたちはおたけびをあげた。甲高く、だが泣いているように聞こえる。ドラゴン兵士達は、地面を蹴り上げ空へと高く飛

び、何匹かにわかれて姿をけした。お願い。こんな夢覚めて。お願いよ。アルトの頭のなかに、兵士の言葉が繰り返し聞こえる。

「魔女が殺したっていうのか…ラスト国の者が」

違う。間違いよ。

「違う!!!!!!」

アルトは汗びっしょりで飛び起きた。ここは……。あたりを見渡すと、自分の部屋だった。パジャマはびっしょりになり、アルトは冷や汗をぬぐった。

「夢だったの？」

ホッとした気持ちでいっぱいになった。あんな事があるはずがない。なんで、こんなバカバカしい夢を見てしまったのかしら。ベットからおり、閉め切っていたカーテンをあけ、アルトはローブに着替え始めた。そのとき。

「わしは知らん！何度言えばわかるのだ！」

父様の怒鳴り声が、城中に響いた。

アルトは急いでローブに着替えると、階段へとおりた。

大広間のガラスが割れ、あちこちに破片が飛び散っている。

母様が怒鳴りまくっている父様の体を必死につかんでいた。割れているガラスの前にたち翼を折りたたんでいるベギスの姿もあった。

ピリピリとした空気をはなっている二人の所に、アルトは下までおりようとしなかった。なんで、あんなにもベギスは怒っているのかしら？階段の隙間からのぞきながら、アルトは思った。

「さあーはやく返してください。貴方達の村の者がやったのは、調査済みなんですよ」

牙をむきながら、ベギスは片方の手を父様の前に差し出した。頭に血が上っている父様は、顔を真っ赤にし、何度も床を踏み鳴らした。「知らぬといっておろう！ベギス王！わしの国で、盗みをやるやつなどおらんわ」

「けれど、昨日の晩魔女の杖がわしらの森に落ちていたんですよ」
冷静にベギスは背中から杖を出すと放り投げた。真っ黒な杖は宙を

舞い、父様、母様の足下に落ちた。それを見て、父様は黙り込んでしまった。母様は、ただただしがみついているだけだった。ベギスがため息をついた。

「盗まれた物はご存じですか？」

静かに父様は、首を横に振った。ベギスは翼を自分の胸にそえた。

「ここです。わしは昨夜、ここを盗られた」

母様は理解ができないようだったが、父様は違っていた。目をまっまるくし、いっきに顔が真っ青になった。父様のあんな姿、初めてみた。

「盗られたのか…心臓の玉を」と父様。

ベギスは頷いた。心臓の玉っていったいなんなの？二人は顔を見合わせ、一言もしゃべらなくなってしまった。わけがわからない母様は、首をかしげている。

「そう言うことだ」

最初に口を開いたのは、ベギスだった。一瞬時が止まってしまったいたかのような沈黙だった。

「わしは、あの玉がないと理性をいじすることはできない。はやく返してもらわないと、この国がどうなるかわかりませんぞ」

また父様の顔が真っ赤になった。「杖なんて、いくらでも作れる！魔女の手だときめつけるな」

ベギスは父様に背を向け翼を広げた。

「では、戦争になってもよろしいんですね？そのくらいの覚悟をきめて、わしはここにきた」

せ、戦争！！！！おもわずアルトは立上がり、階段を駆け下りた。

「駄目！ベギス！戦争なんて考えちゃ駄目」

ベギスが驚いて階段の方に目を向けた。全速力でベギスの元へ行こうとしたとき、父様がアルトの前に立ちふさがった。びっくりしてアルトは止まるとしたが、そのまま父様の胸にぶつかった。

「アルト！子供が口をはさむことじゃない！」

すぐに、ベギスがこちらに目を向けるのをやめた。意地でも父様の腕から逃れようともがいたが、無理だった。

「父様は……戦争になってもいいの？」

悲しい声でアルトは呟いた。

ピクツと父様の体が戦争という言葉で反応した。

「離して父様！ベギスと話をさせて」

「話などない」

冷たいベギスの声が聞こえた。背を向け、こちらを見ようとしてくれない。

「ベギスだって……！！」

こんしんの力をふりしぼり、父様の腕を振り払った。

「戦争なんてしたくないでしょ？」

ベギスは何も言わない。

「私が玉を探すから……戦争なんてやめて」

アルトの瞳から涙がこぼれてきた。ちらりと、ベギスが悲しそうにアルトを見た。顔をおおい、しゃっくりをあげながらアルトは息を整えた。父様、母様は黙っている。

「こんなに平和な国に、戦争なんてもたらさないで。戦争なんて意味のないことしないでよ……ベギス」

「犯罪をおこした者の罪を背負うのは、国全体で背負わなければいけない」

そう言い残し、ベギスは飛んでいってしまった。

「まってよおー！！ベギスー！！」

床に膝をつき、アルトは泣き叫んだ。

「やだよおー……やだぁー」

あの夢は本物だったんだ。夢じゃなくて、現実だったんだ……。ベギス、お願いだから戦争なんてやめて。泣いているアルトに、父様は声をかけようとしたが、何を言っているのか分からず、額に手をてながら母様の肩をたたき、広間からさった。母様は、優しくアルトの頭をなでた。

「母様……。私見たの」

ローブを折り込み、母様は座り込んだ。

「何を見たの？」

「ドラゴン兵士が、何かを城から盗んで、それを誰かに渡したの」

「どこで？」

驚いた顔で母様が尋ねた。

「夢のなかで……。でも、現実におこってたなんて」

「辛いものを見てしまったのね。でも、それがあなたの力なの。い
ずる、予知夢も見erようになるかもしれないわ」

そつと母様はアルトを抱き締めた。

「戦争は、おこってしまうの？」

母様はいっそう強くアルトを抱き締めた。言わなくてもわかった。

「予知夢を見れたら、こんな事になる前に防げたのに」

どうして、事件の時にさかのぼれたのに、どうして予知夢が見れな
かったの。悔しさでいっぱいになり、アルトは自分を責めた。

「アルト、予知夢が見れてもね、見た者はその未来に手を付けては
いけないの」

「どうして？」

抱き締めていた腕を離し、母様はアルトの瞳をじつと見つめた。

こんな時、感がいい自分が嫌になる。

「母様は知っていたのね。この現実の今を予知夢で見ていたのね」
心のどこかで、違うと言ってほしかった。だが、母様はアルトの瞳
から目を離すことはなかった。

「見てたわ。何が盗まれるとまでは、見えなかったけど。戦争にな
ることは、五年前から知っていた」

何かが私のなかで、壊れた。まっすぐな母様の瞳が、むしように許
せない。

「父様は知ってたの？」

「いいえ。あの人には話していないわ。私の力のことも。あなたま
で、私の力が受け継がれてるなんて思わなかった」

額に触ろうとする母様の手を、アルトはふりはらった。また涙がこぼれる。

「どうして！！どうして言わなかったの！言えば戦争にならなかった！！今頃誰も傷つかず、平和に暮らしていたのよ！」

母様が悲しい顔をして下を向いていたが、アルトは言葉が止まらなかった。

「母様の馬鹿！国を守れない力なんて私はいらない！私だったら、すぐ父様に報告したわ。何よ！皆して……これが宿命だっていうの。あの大木だって！！」

もうわけがわからなくなってきた。あんなにも、優しかったベギスの口から、戦争の言葉が出たのも全部母様のせいよ。アルトは母様を睨み付け二階へと駆け上がっていった。

「ごめんね…アルト」

ひそかに母様の声が聞こえたが、アルトは無視した。自分の部屋にはいり鍵を閉めると、崩れるようにドアの前で座り込んだ。何度も何度も息を整えても、涙は一向に止まらない。でも、母様を許すきはなかった。コンコンと誰かがドアをノックした。アルトはびっくりしてドアから離れた。

「誰？」

「ラズラスでございます。話があるのですが、ドアを開けてもらってもよろしいですか？」

ラズラスは、アルトの小さい頃からの親友で、今はアルトを守るためにこの城で兵士として勤めていた。真っ赤な目をこすり、アルトはドアを開けてあげた。長い杖を腰にまき、真っ黒なローブを着てラズラスは立っていた。ローブを腰に流し、ラズラスはアルトの前でかがんだ。

「今から、ラスト国とスカイスネイク国との戦争がはじまります」
アルトは、こんなにもはやく戦争がはじまるとは思ってもみなかった。

「今日ベギスが来て、戦争の事を話したばかりよ。どうして今日

なの……」

もう無理。くいとめれない。

「王様の命令で、アルト姫を安全な場所に避難させろと命令させられました」

「嫌よ……」

小さい声っアルトは言った。ラズラスはため息をつき、立ち上がった。

「わがままを言わないでください。戦争になったら、ここは危険です。どうか私と一緒に来てください」

あきれ顔で、ラズラスはアルトの肩に触れた。

「ラズラスも、戦争に行くのよね。無事帰ってこれる保証もないのよね？」

大切な人を失いたくなかった。ラズラスは、なぜか微笑んでいた。もしかしたら、死んでしまうかもしれないのに。

「国のために死ねるなら。私は悔いはないです」

「ラズラス！」

カッとなって、アルトはラズラスの頬を叩いた。

「私はあなたに生きてほしい。こんな意味のない戦争なんかで、死んでほしくないの!!」

叩いた手を握りながら、アルトは涙をこらえた。赤くなった頬をさすり、ラズラスは腰にまいてある長い杖を取り出した。

「ラ・シェールラドダ」

杖をひとふりすると、杖の先から箒がでてきた。その箒をラズラスはアルトに渡した。

「アルト、私に死んでほしくなかったら、私達の大切な思い出の場所を守って。どうせ、避難してもあなたは逃げるとおもうから」

腰に杖を戻しながら、ラズラスは言った。魔法でだしてくれた箒な古く、切れ目がいっている。アルトは箒にまたがった。

「久しぶりに姫なしで呼んでくれたわね」
とアルト。

「王様の前では、姫をつかわなきゃいけないの。アルト、戦争がおこるのはここだけじゃない。森までも被害にあうかもしれない」

「わかってる。森には、グリムたちもいるから私が守ってあげなきゃ。あの森は、私達の大切な場所でもあるんだから」

「きおつけてね、アルト」

「ラズラスも。絶対に死なないで。できれば、戦争をくいとめたかった」

アルトが指を鳴らすと、氷の杖が手のひらにでてきた。その杖を窓に向けると、窓がいきおいよく開いた。もう一回指を鳴らし、杖はアルトの手の中に消えた。

「アルト！私も……私も本当はこんな戦争したくない」

飛び立とうとするアルトに、ラズラスが本当の気持ちを言った。

あっ！と言うようにラズラスは口を手でふさいだ。

きつとこのような事を言っではいけないのだろう。

ラズラスは、右手をおなかにそえ、綺麗なお辞儀をすると部屋から出て行ってしまった。

兵士であるラズラスが、戦争をしたくないと言うぐらい、この意味のない戦争には皆混乱しているにちがいないわ。

アルトは箒に集中した。

目を閉じ少しづつ箒が浮き上がる。

アルトが前かがみになると、矢のようなスピードで窓にむかって飛んだ。

フラフラしながらも、なんとかアルトは城から抜け出した。村は静まり返り、誰かいる気配もなかった。皆、どこかに非難したにちがいない。すると下の方で魔女の兵士を連れている父様がいた。そこには箒を持ったラズラスと、真っ白いドレスに剣のような氷の杖をもった母様もいる。アルトは、母様を見るなり箒を強く握った。

「痛いなあー。もう少し優しく扱ってくれないかい？」

アルトの耳から箒の声が聞こえた。

「ごめんなさい。さあー急ぎましょ」

体をもっと低くし、箒のスピードをあげた。

森につづく橋には、何人かの魔女兵士がたっている。

魔法でかけられた結界に閉じ込められている動物達もいた。アルトは自分の体と箒に、結界をもくぐりぬけられる呪文をかけた。ちゃんと魔法の勉強をしててよかった、とアルトは思った。下にいる兵士達にきづかれないう、ゆっくりと森のなかへはいっていった。森中の動物達も混乱していた。ザワザワと話し声がとびかっている。

「ねえねえこの森はなくなってしまうの？」

「魔法使いとドラゴン仲がよかったんじゃないの？」

「あの人達が考えている事はわからん」

アルトは、心のなかで何度も動物達に誤りながら、森の奥へと急いだ。

ベギスと来た芝生につくと、アルトは箒からおりた。

箒はみずから小さな小枝になり、アルトのローブのなかにはいった木の葉がついたローブをはたき、アルトは大木の方へと歩いた。一日しかたっていないのに、大木の葉っぱは枯れ、あちこちに白いカビがこびりついている。その大木を取り囲み、身を寄せている動物達がいた。アルトの足音で、動物達がいつせい二本足で立上がりこちらを見ている。

「敵か？魔法使いが、ここまでなににきたんだ」

一匹のトナカイが眉間にしわを寄せて言った。

「敵ではありません」

アルトはそう言いながら近寄っていった。動物達が騒いだ。

「この人、私達の声が聞こえるんだわ！ら魔女でも、私達の声を聞ける人なんていなかったわ」

ウサギが飛び跳ねながら、アルトのもとへ来た。

「あなたは戦争にいけないの？どうしてこの森にきたの？」耳をピンツとたてて、うさぎが聞いてきた。

「私は戦争には反対なの。それに、ここの森にはたくさん思い出があって。意味のない戦争で、ここの森まで傷ついてほしくないの」

うさぎの顔が明るくなった。

「皆！！この人が森を守りに来てくれたわ！！味方よ」

大木のところにいる仲間のほうへ走っていきながら、ウサギは叫んだ。動物達が喜びの声をあげている。すると、動物達のなかにグリム達も紛れ込んでいた。グリム達は、アルトを知っているのか、礼儀正しくお辞儀をしてきた。アルトもあわててお辞儀を返した。

「この国の姫様が、非難もせずこの森にくるとは」

目が両方とも開いていないグリムが現れ、アルトにいった。

「この森を守ると友達と約束したんです。どうか、私にできることがあったら言ってください」

「まだ子供なのに、立派ですね。姫様、戦争はもうはじまります。見える……ドラゴン達は、もうすぐこの森を通してラスト国へと行く」

緑色の手が円を描くように動き、グリムは空を指差した。皆いっせいにグリムが指差す所を見上げた。アルトもつられて見上げる。雨雲が立ち込み、薄暗くなってきたかとおもうと、大きなドラゴンの群れが空に現れた。低い声をあげ、ドラゴンは皆赤いマントをはおっている。

「ベギス……」

アルトはベギスの姿を見逃さなかった。

「ベギス！ベギス！」

大声で名前を呼んだが、聞こえるはずもなかった。きれることがないドラゴンの群れに、動物達はおびえ体を丸くしている。グリム達は、木の葉を集め指を振りながら呪文を唱え始めた。

「この呪文は？」

聞いた事がない呪文に、アルトはまだ空を指差しているグリムに聞いた。

「大木に結界をはってるんですよ。魔法使いみたいに、強い結界ははれないが、この子らを守る程度はできる」

アルトはもう一度空を見上げたが、ベギスはいなかった。「私も手

伝います。そのぐらいの力は私にもあります」

呪文を唱えているグリム達の所に、アルトも加わり、魔女用の結界の呪文を唱えた。

だが、アルトの力よりもグリム達の魔力の方が強かった。

アルトは一生懸命両手を握り、呪文を唱えたが、アルトの結界は全然出来上がらない。

グリム達の力はどうどんまし、大木の周りにはおおきな透明の空気が包みこんだ。そのとき、炎の玉が空から降ってきた。戦争がはじまったのだ。森を囲みながら、魔女とドラゴンが戦っている。アルトの集中が解けた。さっきまで出来上がっていたグリム達の結界が、爆風で消し去られてしまったのだ。グリム達と動物達は吹き飛び、炎の渦のなかに放り投げ出されてしまった。

「皆……!!」

第一章はじまり後半2

アルトはローブの中から箒をだし、またがった。

「俺、炎のなかにはいりたくないよ」

箒が炎に囲まれた森を見て言った。

「皆が死んだら、あなたのせいだからね」

「俺のせいだよ！」

文句を言いながらも、箒は炎に向かって飛んだ。炎の中は熱く、アルトのローブは炎で焦げはじめていた。だが、アルトは引き返さない。熱さで泣いている動物達を次々に見つけ、大木の前に運んできた。グリム達は、自力で出てきたものの、両目が見えないグリムがいない。

「あのグリムは？どこに行ったの？」

アルトはあたりを見渡したが、いない。体中に火傷をおったウサギが、炎の中を指差した。まさか！まだあのなかに！

「もう俺は動けない」

先が焦げ、ぐったりしながら箒は言った。もうこれで飛ぶことはできない。アルトはローブの帽子をかぶり、炎に向かって走った。目の前が赤赤としていて、視界がわからない。息をなるべくしないよう、アルトはグリムを探した。先の方で、わずかだが呼吸をする音が聞こえる。

いた！！！！

グリムは倒れていた。アルトはグリムの体を起こし、背中に乗せ運んだ。熱い……どこを歩けば大木の場所につけるのか、アルトはわからなくなってしまった。このままだと、私達は死んでしまう。そのとき、何かがアルトの体を支えた。

「姫様がここで死んだら、ラズラス旦那に叱られちゃう」

箒だった。ボロボロになりながらも、アルトを助けにきてくれたのだ。アルトは箒をつかんだ。ありがとう。心のなかで呟いた。

「振り落されないように、しっかり持つてろよ」

箒は最後の力を出し、炎のなかを突っ切った。

熱い風がアルトの体力を蝕む。

けど、グリムだけは落さないよう、アルトはしっかり抱き抱えた。

炎から抜けると、箒は芝生に転落した。

アルトの髪は炎でやけチリチリになり、あちこち火傷をおって真っ青になっていた。

痛みにはえながらも、アルトは背中におぶっていたグリムを芝生に寝かせた。

まだ息はしてる。

アルトはグリムの心臓に手を当てた。グリムの意識は、もうろいとしている。空では激しい戦いが行われ、数えきれない魔法と日の玉が森に向かって落ちてくる。グリム達は傷をおいながらも、なお結界の呪文を唱えていた。アルトは息が絶え絶えになり、上手く呪文が言えない。すると、うっすらとはあるが、グリムの意識がもどった。

「アルト姫……国へお帰りください」

グリムの口から血がこぼれ出した。アルトは聞く耳をもとうとはしない。

「王様と王女様が危ないです…見えるんです。この戦争は、これっきりでは終わらない。こんなグリムなど助けても時間の無駄」

「黙って!!」

アルトは大声をだした。

動物達とグリム達が、いつせいにアルトを見た。

「なによ……皆して。もっと命を大切にしてよ。貴方がいなくなったら、皆悲しむのよ……。時間の無駄なんかじゃない」

アルトの魔力が強くなった。

みるみるグリムの体から傷が消えていく。私は助かる命をそのままにしたくない。グリムの体は治り、疲れたのかそのまま眠りについてしまった。魔力の使いすぎで、アルトは目眩がした。しかし、怪

我をしている者達はまだまだたくさんいる。アルトは立上がり、皆に治療の魔法をしようとした。だが、誰もがアルトは限界だときづいていた。

「私達は大丈夫です。だから、先に国へと戻ってください」
ウサギは、傷口を舐めながら平氣そうに笑ってみせた。

「もう結界ももちません。とうかアルト姫、国へ戻って戦争をとめてください」

グリム達が口をそろえて言った。

「でも、そんな体じゃ皆死んでしまう」とアルト。

「こいつらは、大丈夫だって」

フラフラしながら箒が歩いてきた。

「国へ戻る力ぐらいまだ残ってら。さあー乗れ」

真っ黒になった箒の杖は、いまにでもはいになってしまいそうだった。アルトは迷った。空中で戦っている者達は、力が強い。結界を破られるのも、簡単なこと。ぐずぐず迷っているアルトに、嫌気がさした箒は無理にでも乗せた。

「ちよっ、まって」

「ちんたらしてないで、もう向かいまっせ」

箒は力いっぱい空へ飛んだ。皆が小さくなっていく。動物達が手を振ってくれてるのが見える。皆私に期待してくれてる……。

「そうよね。私はラスト国の姫だもの。私の魔力も使って」

親指をかみ、箒に自分の血を垂らした。箒はみるみる赤くなり、空中で戦っているドラゴンや魔法使いをスイスイと通り抜け城へ向かった。

「こりゃいい。魔法使いの血はすげーなあー」

箒はご機嫌だった。村へたどり着いたとき、アルトは吐き気におそわれた。生臭い匂いにする。

「姫様……これはひどい」

炎に包まれた村を見て箒が言った。

ローブで鼻をふさぎ、アルトは村におりることにした。あちこちにドラゴンの死体ごろがり、魔法使いたちも倒れていた。

「まさか、ラズラス旦那も…」

アルトの後をおいなが箒が言った。アルトは足を止め、箒を睨んだ。「ラズラスが死ぬはずないじゃない。絶対に生きてる」

「わかってる、わかってますって」

焦りながら、箒はアルトの背中をおした。家の壁にもたれかかっている、一般の魔法使いや、親を探しながら泣いている魔法使いの子供。見ていられなかった。歩くたびに、魔法使いたちがアルトにすがってくる。

「戦争は、まだつづくんですか？子供が…子供が殺されて。もう私どうしたらいいのか」

そのたびに、アルトは励ました。たくさんの命が犠牲になっている。そのとき、悲鳴が聞こえた。女性の声だ。アルトは声が聞こえた方へ走った。箒も後へつづく。壁をまがったとか、ドラゴンにつぶされそうになっている女性がいた。ドラゴンは目を真っ赤にしながら、狂ったように女性を足で踏んだ。

「お前か！お前がベギス王の玉を盗ったのか！！」

「ち、違います。私は何も……」

アルトは、急いで手のひらから杖をだしドラゴンに突き付けた。

「やめなさい！！」

この声にドラゴンは一瞬ひるんだ。箒はすかさず自分の体に乗せ、こちらに非難させた。

「アルト姫…」

と女性。女性は泣きながら、おなかを押さえている。血が付いた爪を舐めまわし、ドラゴンはアルトを睨んだ。冷や汗をぬぐい、アルトも睨み返す。

「貴様は誰だあ？」

目はうつろで、声は生気すらかんじない。

「この国の姫です！これ以上、意味のない戦争をやめなさい！さも

ないと……」

杖をつきつけている手が震える。アルトは唇を噛み締めた。

「私はあなたを殺します」

「ああーやってみな。体がうずいてしかたがないんだ。血が欲しい……貴様らの血が」

すごい勢いでドラゴンがこちらに向かってきた。

呪文を唱える時間さえないぐらいだった。

アルトはギリギリ、ドラゴンをよけたが、おもいつきり壁に体を打ち付けてしまった。

体がおもうように動いてくれない。チツとドラゴンは舌打ちし、後ろを振り返ると、ゆつとくりと歩いて来た。アルトは、杖を持ち直し掲げた。殺したくない……あんなにも、優しかったドラゴンを。ドラゴンはアルトを片手で持ち上げると、壁にたたき付けた。腰がきしみ、骨が折れる音がした。痛さのあまり、アルトは悲鳴をあげた。

「アルト様……アルト様」

ドラゴンの心の声がアルトの耳に聞こえてきた。牙を向きだしにしているドラゴンを、アルトは優しくなでた。

「やっと、貴方の声が聞けた……」

力はますます強くなり、アルトは息ができなくなってきた。

「もう俺は無理です。理性がたもてません……アルト様、どうか俺を殺してください」

心のなかのドラゴンは、泣いていた。箒が懸命に、ドラゴンに立ち向かっているのが見える。

「駄目……よ。貴方は生きるの……。そしてまた、あの頃みたいに平和な世界を」

「あの玉が見つからないじょう無理です。貴方を殺してしまうまえにはやく！俺は、覚悟ができています。どうかアルト様の手で」殺したくない……でも、このままだと自分が死んでしまう。アルトは、ドラゴンの額に杖をあてた。心のなかにいるドラゴンと、今目

の前にいるドラゴン。どうしてここまで豹変してしまったの。涙が頬を流れた。ドラゴンの瞳からも、涙が流れている。きっと、楽になりたいんだよね……。

「ジェナード……ミエール！」

力強くアルトは呪文を唱えた。杖から光が飛びかい、ドラゴンの頭めがけて爆発した。アルトは吹き飛び、壁に頭をうち目の前が真っ黒になってしまった。

どのくらいたったのだろう。アルトが目を覚ますと、死んだドラゴンが横たわっていた。おもわず、手に持っていた杖を投げ捨てた。杖は魔力を失い消えた。箒が心配そうに覗き込んできた。女性もいる。

「行こう」

箒はアルトの体をつついた。

「私……私ドラゴンを」

言葉にならない。殺してしまったんだ……ドラゴンを。

「姫……！」

呆然としているアルトに、箒が怒鳴った。

「はやく城にいかないと、手遅れになってしまう」

アルトは、やっと正気に戻り箒にまたがった。

「姫様、ありがとうございます。どうかご無事で戻ってきてください」

女性は両手をあわせ、頭をさげた。

「あの一つ頼みごとをしてもいいですか？」

「はい。なんなりと言ってください」

アルトは殺してしまったドラゴンを見た。

「あの子をお墓にいれてほしいんです」

女性は驚いた顔でアルトを見たが、すぐに頷いてくれた。

「ありがとうございます」

ニッコリと女性に笑いかけると、アルトは空へと飛んだ。城に向かうなか、二人は何も話さなかった。

アルトは、ずっとドラゴンの事を考えていた。

自分がこの手でドラゴンを殺す時がくるなんて…。

首にぶらさがっているペンダントを、アルトは握り締めた。ベギス：「ごめんなさい。あなたの仲間を…：私は殺してしまった。城にいたが、ここも、もうほとんど跡形もなくなってしまった。綺麗だった砂時計は割れ、中にはいつていた砂は全部下に落ちている。アルトの部屋も、どこだったかわからないぐらいになっていた。」

「ここから先は、私一人で行くわ」

箒は何も言わなかった。

登れる所までアルトを運び、箒は小枝に変わってしまった。

アルトは小枝をローブの中にいれ、上を目指すことにした。

階段は所々崩れ、足を踏み外しながら進んだ。

父様、母様どこにいったの。そのとき、城が地震のように揺れ始めた。アルトはバランスを崩し、倒れこんだ。大きな音をたてて、城半分が崩れしまった。と、上から呪文を唱える声が聞こえた。アルトは急いだ。階段は途中でできれ、上に残っている灯台に父様、ベギスが戦っていた。二人とも頭から血を流し、フラフラしている。

「ベギス王！！お前はついに理性を失ってしまったのじゃな」

箒にまたがっている父様が、杖で攻撃しながらベギスに言った。

あのとき、アルトが殺したドラゴンと同じくベギスも狂っていた。まともな言葉もつかえず、ベギスはギャーギャーと高い声をだし、口から炎をだしている。

父様も、もう体力の限界だった。

最後の呪文を唱えた瞬間、箒ごと落下してしまった。

魔法はベギスの体を直撃したが、倒れはしない。

アルトは結構な距離がある灯台に向かって全速力で走り、手を大きく伸ばしてジャンプした。ギリギリ灯台の床にしがみつき、アルトはなんとか灯台に登った。あそこらは見えなかったが、血まみれで倒れている母様もいた。アルトは足がからみながらも、母様に近付いた。背中には大きな牙の後が残り、母様は息をしていなかった。

アルトは母様の横にくずれるように座り込んだ。

「どうして：母様。母様」

アルトは、信じられなかった。体を揺すっても、血が大量に流れるだけで母様は目を開けない。もう：涙すらでない。アルトは、母様が握っている長い氷の杖を手にした。

「ア、アルト：」

父様がアルトに手を伸ばし、側に行こうとするが魔力がなくなり動けない。よだれをたらしているベギスを、アルトは睨み、杖を空に向けた。

「アルト、やめるんだ。お前は逃げろ」

すりきれるような声で父様が言った。

だが、今のアルトを誰も止める事はできない。

「ベギス！！勝負よ！」

空にいるベギスに、アルトは怒鳴った。ベギスは真っ赤な目をアルトに向け急降下してきた。しかし、アルトは避けようとはしない。杖を剣のように構え、こちらにくるのをアルトはじっとまった。長い足をアルトの体にひっかけ、ベギスはまた空に舞い上がった。痛さのあまりアルトの顔が歪む。

「デラージュ！」

アルトが呪文を唱えると、空からいくつもの雷がベギスに向かって落ちてきた。

ベギスの体にいくつもの雷がかんつうし、痛さでもがいている。

怒ったベギスは、足につかんでいたアルトを雲おもかかっている場所からたたき落とした。背中が痛くて呪文が唱えられない。そのままアルトは灯台の床に叩き付けられた。アルトは気を失いそうになった。だがこちらに向かってくるベギスを見て、アルトはおもわず杖を上にかざした。必死にとろうともがいているが、杖はびくともしない。

「ベギス：ベギス」

苦しんでいるベギスを見て、アルトは悲しくなった。元に戻って：

ベギス。ベギスは怒り狂い、アルトを足蹴りした。そのままアルトは、灯台からまっさかさまに落ちていってしまった。涙がこぼれ、アルトは意識がとおのいていった。

「アルト姫」

箒の声が聞こえる。目を開けると、箒に体を支えられて飛んでいた。「危なく死ぬところだったぜい。ローブの中は身動きができないから、なかなか出れなかったっすわ」

頭がぼーとする。城の一番下に着地し、アルトを壁にもたれかかせた。いつのまにか、空も静まり返ってる。

「戦争は？終わったの？」

とアルト。それを聞いて、箒はアルトに背を向けた。

「ああ、終わったそうですよ。ドラゴンたちも、皆自分達の国へ帰っていきやした」

「どうして？玉が見つかったの？」

「違います。あいつらの目的が変わってしまったんですよ」

箒の心のなかで泣いているように見えた。

「どうということ？」

箒は黙ってしまった。アルトは体を動かそうとしたが、無理だったので、そこら辺に転がっている小石を箒に投げた。小石は箒の先にコンッとおたった。

「お願い教えてよ！私は姫よ！ちゃんとなにがあったのか報告して」

「もう今日から、姫ではありませんよ……。アルト王女」

悲しそうに箒が言った。

「王女様と王様は亡くなりました。ベギス王の手によって殺されたのです」

心臓がドクンッと鼓動をうった。

「死んだの……？父様も？母様も？」

「そうです」

「だから戦争が終わったってどういうの？」

「はい」

アルトは首についているネックレスを手でちぎり、地面にたたき付けた。

「こんなもの！こんなもの！！」

何度もネックレスを叩き付けても、アルトは悲しみから逃れられなかった。

「ベギス…」

アルトは、拳を握り締め地面を叩いた。血が出ても、皮がはがれても、アルトは叩き続けた。

その日、父様と母様の葬式がはじまった。綺麗な顔は、まるで今でも生きているかのようにだった。村の人達は泣き、ドラゴンを恨んだ。アルトもその一人だった。葬式が終わり、アルトはあの森の動物達を見に行ったが、誰一匹として生きていなかった。グリムも……。今だに玉を盗った犯人がわからないまま、時は過ぎていったのだった。

第2章悲劇の幕開け前半

あれから二十年がたち、ラスト国とスカイスネイク国は、ちよくちよく戦争するようになった。

だが、ベギスはあれ以来、姿を現わさない。

焼けてなくなってしまった森は、アルトが長い月日をかけ、木の種を植えていったので、緑豊かな森へと姿を取り戻していった。

全滅したとおもわれたグリムも、あの時土のなかに隠れた者達もいて、今では数も増えつつある。

大人になったアルトは、あの頃とは違いたくましく、美しく成長していた。

短い黄緑の髪を小枝でしぼり、王女とはいいいがたい茶色の市民用ローブを着て、優しいブルーの瞳でいつも村の人達を見守っている。

腰には、母様の形見である長い氷の杖をいつも持ち歩いている。

あの時のペンダントも、割れ目はいってしまっただが、なぜかアルトは捨てることができず、いまでもつけていた。

アルトはグリムがまじった優しい男性、ロバートと結婚し、可愛い娘もさずかった。

名前は、ウィル・パキンソン。

グリムと魔女の血が混じっている娘は、耳が長くとんがっていて、緑色の長い髪に、大きなブルーの瞳をした、アルトの小さい頃とは間逆の子だ。まだ四歳というのに、上級者並みの魔法をすぐに覚え、魔法使いの先生も教える事がないくらい、覚えがよく、魔力も強い。朝日が昇り、まだ城の者達が起きていないのに、アルトだけは早起きだった。寝巻から茶色のローブに着替え、杖を腰にしぼり村に出かける準備をはじめた。

「ママ。また行くの？」

目をこすり、ウィルがアルトに尋ねた。

「あらら、起きちゃったのね」

靴をはき、アルトはウィルを抱っこした。大あくびをしながら、ウィルはアルトにしがみつく。

「私も行く。村のほうへ出かけるんでしょ？」

最近村では風邪がはやっており、治療魔法が使えるのは、アルトしかいないので、毎朝村に行くのが日課になってしまっていたのだ。

「じゃー用意をして、一緒に出かけましょうね」

アルトはウィルを下におろしてあげた。

「うん」

と言うと、ウィルはパチンツと指を鳴らし、杖をだすと、自分の体をコンコンと二回叩いた。寝巻だった服が、あっというまにローブにかわり、ぐしゃぐしゃだった髪はブラシをかけたように綺麗にまとまった。

「出来たよ！」

元氣よくウィルが言った。

「あんまり魔法に頼っちゃ駄目よ」

しわがよっているローブを直してあげながら、アルトはウィルに言った。魔法が使えるようになってからというもの、ウィルはちょっとしたことも自分でやらず、魔法ばかり使うようになってしまっていた。

「はぁーい」

とウィル。

二人は手をつなぎ、村へと向かった。風は冷たく、空ではたくさん鳥達が歌を歌いながら飛んでいる。アルトはふと、立ち止まり悲しそうに空を見上げた。昔は鳥じゃなくて、ドラゴンが飛んでいたのに。空を見上げているアルトのローブを、ウィルが引っ張った。一気に現実に戻り、アルトはつついっつい作り笑いをウィルに向けた。

「ママ、また悲しい顔してた」

ふくれっつらでウィルが言う。

「そんな事ないわよ。ただ、今日も天気がいいなって。ママは、空が好きだから、つついっつい見ちゃうのよね」

「私は空きらい」

アルトの手を離し、ウィルは先に歩いた。

「どうして？」

とアルト。

「空はママを悲しい気持ちにさせるから嫌なの」

しっかりと見てるんだなとアルトは思った。

娘ができてから、アルトは母様の大変さがわかるようになってきていた。私が行き続けるまで、この子にどれくらいの事を教えてあげられるのだろう。でも、あのことだけは、大人になった今でも許せない。考えているうちに、いつのまにか村についていた。村の人達は城の者達よりも起きるのがはやく、せつせと働いている。

「おはようございます、アルト王女」

歩くたびに、アルトは村の人達に挨拶された。ウィルも、元気いっぱいに走り回り、一人一人の村の者にお辞儀をして挨拶している。玄関先で立っている者達もたくさんいた。この人達は風邪をひき、薬では治らないので、アルトがくるのをずっと玄関先で待っていたのだ。

「よし」

腕まくりをし、アルトは気合いをいれた。一軒目は、腰をまげたお婆さんのところだ。ゴホゴホと咳き込んでいる。

「大丈夫ですか？」

アルトはお婆さんの背中をさすってあげた。走りまくっていたウィルも、真似してお婆さんの背中をさする。

「すぐ、よくなりますからね」

両手を握り、アルトは静かに呪文を唱えた。小さい光がアルトの手のひらに浮かび上がる。黄色く光る珠が出来上がると、お婆さんの額に押し当てた。ガラスが割れるかのように、光は消えてしまった。お婆さんの顔色がよくなっていくのがかわる。

「すまないね、アルト王女様」

アルトの手を握り、お婆さんが深くお辞儀をした。

「また、具合が悪くなったら言ってくださいね」
優しい笑顔で、アルトもお婆さんの手を握り返す。

お婆さんが家の中には行っていくのを、ちゃんと見届けると、アルトは次の患者の所へ急いだ。この日も忙しく、たくさん患者をアルトは治療した。ウィルも、ぎこちないが、ちゃんと手伝いをしていいる。何件まわったかわからないぐらいだった。疲れ果てたウィルは、じべたに座り込んだ。腕まくりをおろし、アルトもその隣りに座った。

「ウィル」

ウィルの姿を見つけた村の子供達が走ってくる。長い耳がピクツと動いた。耳が長いウィルは、人の倍音が聞こえやすいのだ。一人の男の子が座っているウィルの手を引っ張った。

「今から、箒の競争するんだ。ウィルも一緒にしようよ」

「しよう、しよう」

後の五人の子供達が口をそろえて言った。ウィルは、アルトを見た。とても遊びたそうな顔をしているのは、わかっていた。髪をしばっていた小枝をとり、アルトはその小枝を放り投げた。みるみる小枝から、ボロの箒に姿をかえた。

「ああー、せっかく寝てたのに」
と箒。

箒の言葉は、子供達には聞こえない。けれど、アルトの血を受け付いているウィルは、箒の言葉は普通に聞こえる。

「ちょっとだけえー」

そう言いながら、ウィルは箒をつかみ、一番に空へと飛んで行った。
「まてよおー」

続けて六人の子供達も箒にまたがり、空へ。楽しそうな、はしゃいでいる子供達をアルトは見つめた。はやく、戦争を終わらせて皆を安心させたい。そして、きつとまた平和な一日が戻ってくる。

「みーつけた!」

後ろから名前を呼ばれ、アルトは驚いて立ち上がった。真っ黒な短

い髪はピンピンと跳ね上がり、タレ目の茶色の瞳をしたラズラスが、黒馬に乗って現れた。

「驚かさないでよ」とアルト。

戦争で生き残ったラズラスは力を認められ、今では兵士の隊長をとめている。馬が足をおり、アルトにお辞儀した。

「おはようございます、アルト王女」

耳の奥から、馬の声が聞こえた。

「おはよう」

アルトは馬の頭をなでてあげた。

「この子、なんて言ったの？」

黒いマントをひるがえし、ラズラスは馬からおりた。ラズラスには、馬の声が聞こえないのだ。

「挨拶されたわ」

微笑みながら、アルトは答えた。

「私もお前の声を聞いてみたいものだわ」

背中を優しく叩いて、羨ましそうにラズラスが言った。

「最近、ラズラス旦那は疲れてるのか、イビキが酷くてしょうがないんですよ」

困ったように馬が、チラッとラズラスを見た。アルトは、噴出してしまった。きつと、ラズラスが聞いたら怒るにちがいないわ。クスクスと笑っているアルトを、ラズラスは不思議そいに見ている。

「それでは、私はこれからガールフレンドの所に行ってきますので、失礼します」

もう一度お辞儀をし、馬は走って行ってしまった。まだアルトは笑っていた。

「どうしたの？」

とラズラス。

「な、なんでもない」

慌ててアルトは真顔になった。怪しそうにラズラスはアルトを見て

いたが、それ以上何もつっこもうとはしなかった。

「ロバート王が、アルト王女を探していたわよ」

腰につけた杖を後ろにまわし、ラズラスは座り込みながら言った。

「ふーん」

興味なさげにアルトは答える。

アルトもラズラスの隣りに座った。二人は黙り込みながら、空で遊んでいるウィル達を目で追いかけていた。

「今日、ウィルのけいこの日だって知ってた？」

ボソッとラズラスが口をひらいた。

「えっ！そうだったっけ？」

すっかり忘れていた。いつも魔法攻撃の呪文を、ラズラスにけいこをしてもらっているのだ。ひじをつき、顎を手で支えラズラスは溜め息をついた。

「まあー、今日はけいこ中止でいいんだけどね」

「ごめんね」

また沈黙がつづく。

「ねえー」

とアルト。

「なに？」

「私、夢を見たの。たぶん、現実にかかる夢」

母様の言うとおりに、アルトも最近予知夢を見るようになっていた。

そのことは、ラズラスにも話してあることだったので、別に驚きもしない。

「どんな夢を見たの？」

「また戦争が始まる夢。でも、今回の戦争はいつもと違うの。もっと大きい戦争になるわ」

真剣なまなざしで、アルトはラズラスを見た。それを聞き、ラズラスの表情も変わった。

「いつ頃なの？」

冷静にラズラスは聞く。

「わからない。でも、たくさんの血が流れる事はたしかよ。ラズラス」

アルトはラズラスの手を取った。

「ウィルの事、しっかりと守ってあげて。あの子、魔力は強いけど、戦うことに抵抗があるみたいだから」

「大丈夫よ。あなたの大切な者を、これ以上なくしたりさせないから」

ラズラスの言葉を聞いて、アルトは安心した。

「ありがとう。あの子のこと、よろしく頼むわね」

二人が話しているうちに、いつのまにか空にいた子供達が帰ってきていた。箒を引きずりながら、ウィルはアルトの胸に飛び込んできた。

「アルトー、頼むからもう寝かせてくれ」

疲れ果てた箒は、ぐったりしていた。腰にまいている氷の杖を、アルトは箒に向かってひとふりした。箒は小枝に変わり、アルトの髪に戻った。アルトはウィルを抱っこし、ラズラスと一緒に城へと戻った。城の門のまえでは、ロバート王がウロウロしていた。

「パッパ！」

ウィルはアルトの腕から飛び下り、ロバート王の所へ掛けて行った。「おお、ウィル！」

掛けよってくるウィルを抱き締めようとロバート王は、めいいっぱい腕を広げたが、ロバート王はウィルよりも身長が引くいため、抱き締めるといふよりも、抱き締められる状態になってしまった。

「あなた、ずっと門の前にいたんですか？」

「朝からウィルの姿がなかったから、心配で朝ご飯も喉がとおらんかったわい」

膨れ上がった腹を、ロバート王は叩いてみせた。ウィルも真似して、ロバート王の腹を叩く。アルトとラズラスは顔を見合わせてクスツと笑った。この瞬間が、一番アルトは幸せを感じられた。優しい夫に、可愛い娘。いつも側にいてくれる友。こんなにも幸せなのに、

なぜかベギスの面影を求めてしまう自分自身が嫌になる。

夜になり、アルトはウィルと一緒に眠りにつこうとしていた。

「ママ、いつものお話して」

寝付けないウィルが、アルトにお願いした。あまりきがのならないアルトだったが、ウィルがあまりにも見てくるので、しかたがなく、いつものお話をしてあげることにした。

「昔々ある所に、二つの島が空に浮かんでいました。二つの国はとても仲がよく、平和な日々をおくっていました。所が、ある日のこと、ドラゴンの王様が勘違いのすえ、この国に戦争をもたらししてしまったのです。皆はドラゴンの事が大好きでした。けれど、戦争はじまってからというものの、皆はドラゴンを憎み始めました」

「ドラゴンって、大きいんでしょ？」

話の途中で、ウィルがわりこんだ。

ウィルはドラゴンを一度も見た事がない。というよりも、アルトがドラゴンの姿を見せないようにしているのだった。

「そうよ。大きくて、とても凶暴で、村の人達を苦しめているの」

「悪いやつなんだよね」

とウィル。すぐに返事ができなかった。悪くなってしまったのは、あの玉がなくなってしまったせい。ほんとうは…とても優しいドラゴン達だった。とは、ウィルには言えなかった。

「もう寝ましょ。話のつづきはまた今度」

毛布をウィルに掛けてあげた。ちよつともものたりなさそうな顔をしていたウィルだったが、悲しい顔をしているアルトを見て、わがままは言わないことにした。

☆夢のなか

暗くて、とても苦しい空気にアルトは包まれた。夢のなかだと、すぐにわかった。

真っ暗で何も見えない。だけど、暗闇の奥で誰かが苦しんでいるのがわかる。

「もう、誰も傷つけない……誰か、助けてくれ」

この声の持ち主が誰か、アルトはすぐにわかった。

「ベギス、ベギスなのね」

ベギスの強い心が、アルトの夢のなかに入り込んできていたのだ。だが、ベギスはアルトの声が聞こえないようだった。

「わしは、わしは……」

声が遠ざかっていく。

「まって！ベギス」

アルトは暗闇のなかを、無我夢中で走った。

次の瞬間、目の前が明るく輝いた。

真っ暗だった空間が、急に野原に変わった。野原にはウイルの姿もある。何かをじっと見つめ、剣を構えているようだ。アルトはウイルに近付いた。じっと見つめていたものは、小さな双子のミニドラゴン達。どうして剣なんて構えているの？そのとき、ウイルが構えていた剣を双子のドラゴンに向かって振り下ろそうとした。

「駄目よ！ウイル！！殺したら駄目」

ウイルの動きが止まった。

もしかして、私の声が聞こえるの？辺りを見渡しているウイルに手を伸ばそうとしたが、またもや映像が切り替わった。小さい頃のアルトが、ベギスと一緒に空を飛んでいる姿だ。胸が苦しくなった。ベギスにいたい気持ちと、憎しみの気持ちがまざり、アルトは頭がおかしくなりそうだった。すごい速さで、二十年前の記憶が、アルトを痛めつけるかのように次々と目の前に映像が現れる。

「やめて…お願い」

頭をかかえ、アルトは座り込んだ。

「アルト」

優しいベギスの声が、かすかではあるがアルトの耳に聞こえた。

「ベギス！」

右手をのばし、アルトは飛び起きた。隣りでは娘のウィルがぐっすりと眠っている。アルトは両手で顔をおおった。

「ベギス…貴方は苦しんでいるのね」

ずっと涙を我慢していたアルトの瞳から、一粒の雫が落ちた。月の光りが窓に差し込み、首にぶら下がっているペンダントを照らす。その夜、アルトは眠る事ができなかった。

第二章悲劇の幕開け後半1（前書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。まだまだ長いストーリーなので、よろしかったら、これからもお付き合いください。

第二章悲劇の幕開け後半1

いつもの朝が訪れ、アルトはまだ寝ているウィルに優しくキスをしてあげると、ローブに着替え。アルトの目元にはくまが浮かび上がり、頭もボーとしていた。ドアを開け、重い足取りで階段をおりると、ラズラスがロバート王となにやら話し込んでいたようだった。

「どうしたの？」

あくびをし、背伸びをしてアルトは二人の元へと足を運ぶ。二人とも真剣な顔だ。

「さっき兵士にスカイスネイク国の様子を見に行ってもらったんだ」爪を噛み、ロバート王はにがい顔をして口をひらいた。

「そしたら国のなかには、ドラゴン一匹たりとも姿がなかったそうなんです」

続けてラズラスが言った。

「なぜ？なぜ、誰も国にいないの？」とアルト。

「また、戦争がはじまるかもしれん。村の者達にも用心するよう伝えなければ。それから、兵士も村へ待機させろ」

ロバート王は、ラズラスに指示をだした。

「わかりました」

キリッとした声でラズラスは返事をし、一礼をすると、マントをひるがえし門へと掛けていった。

「あなた、私も村へ行ってきます」

とアルト。

目をまんまるくして、ロバート王は首を横に振った。

「ならん。お前はウィルの側にいてあげろ。村は兵士のものにまかせておけばいい」

だが、アルトはロバート王の言葉も聞かず、ラズラスの後を追って行った。怒鳴っている声が聞こえたが、アルトは後ろを振り返らな

かった。

「ラズラス！まって。私も行くわ」

やっとラズラスに追いついた。何を言っても聞かないアルトの性格は、ラズラスがよくわかつている。

「ではまず、村の人達を広間に集めましょう。それから……」

ときばきとラズラスが話始めた。アルトは、ラズラスの話を聞きながら、ふと空を見上げた。

鳥達がいらない……。そのとき、胸騒ぎがした。アルトの足が止まった。嫌な予感がする。それにきづき、ラズラスも足を止めた。

「どうしたの？アルト」

空をじっと眺め、アルトはいつもと違う空気を感じ取った。

「くる」

小さい声でアルトが言う。

「えっ？」

ラズラスは何も見えない空を見て聞き返す。

「急いで村にいくわよ！はやく非難させないと」

急にアルトが走り出したので、ラズラスも慌てて後を追う。

「ど、どうしたっていうのよ」

状況がよめないラズラスは、混乱していた。

この気配。まちがいない。どんどん近付いてくる。

「ドラゴン達が、こちらに向かってくるの。はやくしないと皆が」

気配は村の方に、どんどん近付いている。それを聞いたラズラスは、やっと事態が飲み込めた。ラズラスは、走りながら口笛を吹いた。

どこからともなく、黒い馬が横から走って来た。

「お呼びですかい旦那」

馬は走っているラズラスの横にぴったりとくっつく。ラズラスは馬の首をもち背中に乗ると、アルトの手を引っ張り後ろに乗せた。

「あと、どれくらいでドラゴン達は村につくの？」

とラズラス。

「もう五分もないわ」

腰にまいてある杖をだし、ラズラスは空に向かって花火を打ち上げた。色とりどりの花火の合図とともに、空からたくさん魔女兵士が箒にまたがって姿を現わした。地上すれすれまで急降下し、魔女兵士達はラズラスの後につづいた。

「いいかい。お前達は、先に村に行き皆を非難させるんだ。時間がない急いで！」

兵士達は二人を追い越し、あっというまに見えなくなってしまった。いつも以上の胸騒ぎに、アルトは苦しくなった。

「アルト？大丈夫？」

馬を走らせ、ラズラスは心配そうに背中越しにいるアルトに話しかける。胸を押さえ、アルトは大きく息を吸う。

「大丈夫よ」

「速度をあげるから、しっかりつかまって」綱を大きく振りかぶり、馬の速度があがった。

アルトは落とされないようにラズラスの腰にしがみついた。村の方向から、炎が立ち込めている。

「遅かった…急いで！はやく」

ラズラスは馬の横腹を足で叩き、うながす。

馬も懸命に走る。村の者達は、パニックにおちいつていた。兵士達が非難をさせようとしても、村のものは言う事を聞かない。皆バラバラになって逃げていり。逃げる村の者達で、二人は前に進むことができなかった。

ラズラスは綱を大きく引っ張った。馬の足が止まる。数人の兵士が空の上でドラゴンと戦っていた。

「アルト王女」

魔法でマントをだし首に巻き付け、ラズラスは綱をアルトに手渡した。

「私はドラゴンと戦う。アルトは、皆を非難させて。貴方の言う事なら、皆聞くはずだから」

「わかったわ」

馬からおり、ラズラスは長い杖にまたがった。

「ラズラス」

「なに？」

けわしい顔で、アルトは空を見る。

「今回の戦争はいつもと違う。きおつけて」

「ええ。今日のドラゴンのなかに強い力を感じるから、手強いとおもうわ」

「ラズラスもかんじてたの？」

「さすがに、ここまで魔力が強いと、いつも感じない私まで、体中ビリビリ伝わってくるわよ」

ラズラスの杖に力がある。

「行ってくるわね」

呪文を唱え、ラズラスはじぐざぐを描きながら空にいる兵士の所へ飛んでいった。

アルトは綱を引っ張り馬の向きを変えた。

そして、大きく息を吸った。

「静まれえー！」

アルトの声に、逃げ回っていた村の者達の足が止まり、皆アルトを見た。

バラバラになっていた者達も、こちらに歩いてくる。誘導していた

魔女兵士が、箒からおりアルトの横に並ぶ。

皆不安な顔をしていた。泣いている子供もいる。

「皆聞いて。魔女兵士達が、貴方達を安全な場所に非難させます。

だから、バラバラに逃げないで。皆で力を合わせてください」

皆静まり返り、横にいる人と顔を見合わせた。

「急ぎましょう。ここはもう危険です。皆さん、兵士達の後についてください」

魔女兵士は、前と一番後ろに別れ、こちらに攻撃がきても大丈夫なよう態勢をとった。

村の人達が動き出す。

アルトは先頭を歩き、ときどき空で戦っているラズラスを見た。たくさんの兵士達が箒から落ち、空から急降下してくる。

それにつづき、ドラゴンは地上に落とさないよう、落ちる兵士のローブを口に加え、また空に持ち上げた。皆両手で頭を包み、足早に避難場所へと向かう。

アルトは、少しづつ馬の速度を下げた。

「どうしたんですか？」

後を抜く村のものを見て、馬が聞いた。

「私だけ非難するわけにはいかない。私も戦うわ」

馬からおり、アルトは杖をとりだし、ラズラスと同じマントをだし首に巻く。

一番後ろにいた魔女兵士が、その姿を見てアルトの元に来た。

「どこにいかれるのです？」

ローブの帽子を深くかぶった兵士が聞く。

髪につけていた小枝をとり、アルトは地面においた。

「私も戦うのです。村の人達を頼みます」

「駄目です。貴方は国の王女なのですよ。王女様にもしものことがあつたら」

兵士の声が焦る。

「王女が村の者達を守れないでどうするの？ 貴方にも、家族がいるでしょ？」

優しくアルトは兵士に問い掛けた。兵士が村の列に目を向ける。

息子を連れている女性が、足を止め兵士の事を見ていた。

きっと、あの人が奥さんなのね。

「貴方も、貴方の家族も私が守ります。それが、王女としてのつとめだから。だから、いかせて？」

兵士は一步アルトから身を引いた。

「わかりました」

声を震わせ、兵士は頭を下げたまま動かなくなってしまった。ニッコリと兵士に微笑む。

「箒さん。起きて。仕事の時間よ」

地面にいていた小枝が、アルトの声とともに箒へと姿をかえた。

「おはよう、アルト王女。仕事にしては、これはまた…」

体を起こし、箒はちよつと言葉をつまらせた。

「戦争のお時間ですかい」

「ラズラスが空で戦っているわ。行きましょう」

アルトは箒にまたがると、マントを後ろにながした。

「承知いたしやしたよ」

ゆつくりと地面から足が離れる。

次の瞬間、箒は空高くとんだ。風でアルトの髪がなびく。

そのとき、ぐったりとした兵士を口に加え、振り回しているドラゴンがいた。

アルトは迷わず杖をドラゴンにむけ、呪文をはなった。

矢のような細長い魔法はドラゴンの腹に直撃し、爆発した。

ドラゴンの口から開放された兵士が、地面めがけて落ちていく。

アルトは急いで体をそりかえし、急降下した。

手を伸ばし、なんとか兵士の体をつかみ、箒を上を持ち上げた。

だが、その兵士はもう息絶えていた。

頭から血を流し、顔が真っ青になっている。

「もう少し、はやく来てたら」

アルトは兵士の体を抱き締めた。

とても冷たく、しだいに体が堅くなっていくのがわかる。

一回地上におり、死んだ兵士を地面に寝かせた。

アルトのマントは兵士の血で赤く染まってしまった。堅くなってしまった兵士の両手をおなかにのせた。

「アルト王女！ドラゴンが」

箒がアルトの背中を叩いて言った。

アルトは空を見上げた。

ドラゴンの群れが、魔女兵士達に追いかけているなか、城へと進路をかえていた。

城の塔には、もう無数のドラゴン達が飛びかい攻撃をしている。

「ウィル!!」

アルトの顔が真っ青になった。

まだウィルは寝室で寝ているはず。もし、ドラゴンに見つかってしまったら。

アルトは慌てて箒にまたがり飛んだ。

間に合って……ウィル。

第二章悲劇の幕開け後半1（後書き）

もしよろしかったら、感想などを書いていただければうれしいです
☆今後の参考にしたいとおもっていますので、よろしくお願いします。

第二章悲劇の幕開け後半2（前書き）

感想を書いていただければ、幸いです。では、ラスト国の世界へどうぞ足を踏み入れてください☆

第二章悲劇の幕開け後半2

城の騒がしさに、ウィルは目をこすりながら起きた。部屋の窓ガラスがなぜか割れている。

「ママ？」

ウィルはアルトの姿を探しに、ベットからおりと、ドアを開けた。魔女の悲鳴とドラゴンの呻き声がウィルの耳に入ってきた。驚いたウィルは、すぐにドアを閉めた。

耳がズキズキする。

「な、なに？」

ウィルは頭のなかが真っ白になった。

割れた窓に目を向けると、大きな翼をはやした者が、こちらに向かって飛んでくるのが見える。

ウィルは怖くなった。

「ママァー…ママァー」

ブルーの瞳から、大粒の涙がこぼれてきた。

そのとき、ドラゴンの息遣いがかすかに廊下から聞こえて来た。

ウィルは口を両手で押さえる。

どこかに隠れなきゃ。

つまさきで歩きながら、ウィルは身を隠す場所を探した。

どんどん足音が近付いてくる。

ちょうど開けっ放しになっていたクローゼットのなかに、ウィルは隠れることにした。

服がたくさんはいったクローゼットは狭く、ウィルはなんとか押し込みように入り込み、クローゼットを閉めた。

すると、ドラゴンの足音がやんだ。どこかに行ってしまったのかしら？安心していた瞬間、ドアがすごい音をたて壊れた。

ウィルはびっくりして声をだしかけたが、慌てて口を押さえた。

クローゼットの隙間から、ドラゴンの姿が見える。

さっきまで寝ていたウィルのベットを嗅ぎまわっていた。

「変態……」

ボソッとウィルが言った。

ドラゴンの耳がピクツと動いた。クローゼットをじーと見ている。

心臓がバクバクと鼓動をうつ。

ウィルは両目と同じ、祈った。

誰か……助けて。お願い。

太い足が、クローゼットのほうへと足を運ぶ。

「ウィル！」

アルトの声が聞こえた。

割れた窓ガラスから箒ではいり、アルトはクローゼットの前で立っているドラゴンに呪文を放った。

真っ黒いホールが現れるドラゴンを吸い込んでしまった。

アルトは箒からおり、ウィルのベットを探す。

いない……。

アルトは泣きそうになった。

「ママ」

後ろからウィルの声が聞こえた。

クローゼットのなかからウィルが泣きながら出て来たのだ。

アルトはウィルに掛けより、自分の胸に押し当てた。緊張がとけた

ウィルは、しゃっくりをあげながら大泣きした。

「どこも怪我してない？」

ウィルの体あちこちを触り、アルトはもう一度抱き締めた。

「アルト王女。はやくここから逃げないと」

と箒。

やっとウィルを離すと、アルトは窓から逃げよとした。が、窓の外にはたくさんのドラゴンの群れが。

さすがに、こんな量を一人で倒せるはずがない。

アルトはウィルの手を引っ張り、ドアから逃げることにした。

箒もついてくる。

泣きながらも、ウィルはアルトに手を引かれつつ走った。

長いガラス張りの廊下を走っていたとき、アルトは心臓が締め付けられるような痛めを感じた。

アルトは痛さでうずくまる。

「ママ！ママ、大丈夫？」

痛さでアルトの干たいかは冷や汗が流れ落ちる。

そのとき、何か強い力がこちらに向かってきていた。アルトは反射的にウィルを自分の体に包むようにして抱き締めた。

ガラスが、勢いよく割れた。

破片がアルトの背中に突き刺さる。痛さで顔を歪めた。

翼をはためかす音が、アルトの後ろから聞こえる。

ウィルは体を小さくして、アルトのローブを握っていた。

この力は……。

抱き締めていた手が緩む。

右目がつぶれたベギスが、廊下に立っていた。

首には、アルトとおそろいのペンダントをつけ、鱗にはいくつもの戦いの傷がある。

アルトは背中に刺さったガラスの破片を、みずからとった。

血がポタポタと流れ落ちる。

「ウィル」

体をなんとか起こし、アルトはベギスからウィルを隠すように立ち上がった。

「貴方は逃げなさい。森へといけば、グリム達があなたを守ってくれるはずよ」

「嫌！ママは？ママも一緒に逃げよう」

ウィルはとてつもないドラゴンの力に、体の震えが止まらない。

「箒さん、ウィルのことお願い」

「アルト王女はどうするんですかい？」

箒がベギスを見上げ、戸惑って聞いた。

「私は、ベギスと決着をつける。だから、ウィルを森へ非難させて」

「嫌！」

ウィルが泣きながら叫んだ。

「嫌、嫌だぁー」

箒はアルトとウィルを交互に見た。アルトは箒を見て静かに頷く。泣いているウィルのまたに箒はもぐりこみ、浮かんだ。

ウィルがだだをこねておりるまえに、箒はすごいスピードでそこから去った。

ウィルの泣き声が廊下に響いていたが、しだいに聞こえなくなっていく。

真っ赤な瞳をぎらつかせ、ベギスはじっとアルトを見ている。

「久しぶりね、ベギス」

杖を構え、アルトは口を開く。

でも、ベギスは攻撃をしかける気配がみられない。

ただ、じっとアルトを見ているだけだった。

口をパクパクと動かし、何かを伝えようとしている。またアルトの心臓が痛みだした。

もしかして、この痛みはベギスの痛みなの？

「苦しいの？」

とアルト。

何も言ってくれない。

廊下から、数人の生き残った魔女兵士達がアルトの姿を見つけこちらに走ってきた。

「王女様が、ドラゴンに捕まっているぞ！」

数人の兵士達が、いっせいにベギスめがけて攻撃魔法を放つ。

ベギスは苦痛で悲鳴をあげた。

だが、攻撃されてもベギスは兵士達に手を出そうとしない。

「やめて！違うの。このドラゴンは」

アルトが叫んでも、兵士達は攻撃をやめない。

魔法攻撃をもろにくらいながらもベギスは、首についているペンダ

トをアルトに見せようと、アルトの前に頭をささげた。

一人の兵士が、死の魔法の呪文を唱える言葉が聞こえた。

真っ白な女神様が現れ、ベギスの頭めがけて走ってくる。

「駄目えー!!」

アルトは両手を広げ、ベギスの頭を守ろうと身を乗り出した。

剣を構えた女神様は、アルトの腹にかんつうすると消えてしまった。首につけていたペンダントは粉々に割れ、時が止まったように静まり返った。

しだいに、兵士達が騒ぎ出す。

体から力が抜け、アルトは後ろへ倒れこんだ。

何かが、体を支えてくれてる。

ベギスが、涙を流しアルトを手のひらにのせた。

「心が、少しづつもとってきているのね、ベギス」

嬉しい気持ちで、アルトはいっぱいになった。

首についているペンダントを、ベギスは引きちぎりアルトのおなかの上においた。

目の錯覚なのか、ベギスの左目の瞳が赤くではなく、深緑に戻っていくのがわかる。

「アルト…アルト」

ようやくベギスが言葉を発した。

気が遠くなっていく。

優しいベギスが、また戻ってきてくれた。

ベギスの涙を、アルトは力のはいらない腕を必死に伸ばし拭き取ってあげた。

「そんな悲しい顔をしないで。また、ドラゴン達と一緒に暮らしましょうね。私の娘も、きつと喜ぶ……」

静かにアルトの腕がベギスの頬を伝っておちた。

深い深い水のなかにはいった感覚がアルトの体を襲い、アルトは目を閉じた。

ベギスはアルトの体を揺する。

でも、アルトは目を覚まさない。

ベギスは怒り狂い泣き叫んだ。

またもや、ベギスの瞳が赤くなり、魔女兵士達を睨み付けた。

口から炎をだし、次々と魔女兵士達を殺して行く。

ベギスの瞳からは、とめどなく涙が流れていた。

「……」 城から抜けだし、森に向かっていているなか、ウィ

ルはふと、アルトの気配がなくなっていくのを感じた。

「ママが、ママが死んじゃった」

ウィルの言葉に、箒は急停止した。

「な、なんだって？」

「ママのね：魔力が消えちゃったの」

涙が溢れる。

なんとかアルトの気配を探そうと、ウィルは集中した。しかし、あの強いドラゴンの力は感じられても、アルトの魔力は、もうどこにもない。ウィルは、箒から飛び下りた。

バランスを崩し、ウィルは顔を地面にぶつけてしまった。

箒が慌ててウィルの側へと行く。

ウィルは顔に土がついたまま立ち上がり、城の方向へと走った。

「まて！ウィル」

「邪魔しないで！」

止めてくる箒にむかって、ウィルは金縛りの呪文を唱えた。

ピタッと箒の動きが止まり、草のなかをコロコロ転がっていったしまった。

ウィルは走った。ママ：ママ。

前しかみていなかったウィルは、何かにつまづいてこけてしまった。

「なんなのよ」

泣きながら、ウィルは頭をさすり後ろを振り返った。つまづいたものとは、怪我をして動けなくなってしまった、双子のミニドラゴン、二匹だった。

体を寄せあい怯え、ウィルを見ている。

無視して城へ向かおうとした。だが、ここでこの子達を殺してしまわないと、また大きくなった時に村を襲われてしまう。

ウィルはミニドラゴンに近付いて。手のひらから杖をとりだし、その杖に呪文をかけた。杖は鋭い剣にかわった。

手に汗がにじむ。ミニドラゴンの目の前にたつと、ウィルは剣を大きく上に持ち上げた。状況がよめないミニドラゴンは、キューと鳴いた。

ドラゴンがいるから……ドラゴンがいるから、戦争がおこってしまうのよ。ママだって。ウィルは大声をあげ、剣を振り下ろした。

「駄目よ！ウィル。殺したら駄目！」

アルトの声が聞こえた。

あと少しというところで、ウィルは剣を止めた。

ミニドラゴンは両目をギュッと閉じている。

「ママ？」

辺りを見渡したが、アルトの姿などあるはずがない。けど、アルトの声が聞こえたのは本当だった。

体からいっきに力がぬけ、ウィルはミニドラゴンの前で座り込んだ。魔法が解けた剣は、ただの杖に戻ってしまった。

両手で頭をおおい、ウィルは泣き叫んだ。

一匹のドラゴンが歩み寄ってきて、ウィルの涙を舐めた。

殺意のない綺麗な心のミニドラゴン。

こんな子達を、私は殺そうとしてしまった。ママの声が聞こえなかったら、きっと私はこの子達を殺してしまっていた。

「ウィル！どこなの。返事をして」

そのとき、ラズラスの声が聞こえてきた。

探しにきてくれたんだ。

ウィルは立ち上がり、ラズラスの名前を呼ぼうとした。

しかし、ミニドラゴンがこんな所にいては、何をされるかわからない。

「貴方達も一緒にくる？」

大きな瞳で見つめてくるミニドラゴンに、ウィルは聞いた。

ミニドラゴン達はウィルの足下まで歩いて来て、スリスリと体をすりよせてきた。

これが返事なのね。

杖を拾い、ウィルはミニドラゴンに魔法をかけた。

「いた！」

ラズラスが草の茂みから現れた。

右肩から大量の出血をしている。ローブも、ひどく破れていた。

やっと見つけたウィルを抱き寄せ、頭をなでまわす。ふたたび、ウィルは涙をながしラズラスのローブに顔をうずめた。

「ウィル、無事でよかった。よく頑張ったわね。怖かったよね」

と、ラズラスはウィルしか見ていなかったもので、二人の子供に気がついたのは、少し遅れてからだった。

双子の少年二人が、木の側で座っている。

「この子達が怪我をして。治療をしてあげてたの」

不思議そうに見ているラズラスにウィルが答える。

「そうなの。さあー貴方達も村へ戻りましょう」

差し出したラズラスの手を双子の少年達は握った。

ラズラスが少年達の手を引き、歩こうとしたがウィルはうつむいたまま、行こうとしない。

「どうしたの？はやく行くわよ。ママが城でまっているはずだから」

「ママは…ママは」

言葉がでない。

顔をくしゃくしゃにし、ウィルは泣いた。

心配そうにラズラスが見ている。

「ラズラスは…わからないの？ママの気配が消えたこと」

「えっ？どうい…」

「死んだの！ママはもういないの。死んじゃったの……」

「嘘…」

少年達の手を離し、ラズラスは髪の毛をかきむしった。

「嘘よ。アルトが死ぬはずないじゃない。きっと城に戻ったら元気に迎えてくれるわ。お疲れ様って」

「感じないの。いつも側にいてくれたママの魔力が感じないの」
ラズラスは芝生に両手をつけ、地面を叩いた。

「嘘！だって……だって」

ーウィルのこと、これからもよろしく頼むわねー

あるとき、アルトがラズラスに言ってきた言葉を思い出した。

「貴方は、予知夢で見ているの？自分が死んでまうってわかっていたの？アルトォー！」

空に向かってラズラスは叫んだ。頬を涙がつたう。

ウィルも声が枯れるまで泣いた。

城へ戻ったのは、それから数時間してからのことだった。

アルトの死体は、なぜかウィルの寝室に運ばれたという。

ベットの隣りには氷の杖と、それにペンダントもおかれている。

信じたくない真実に、ラズラスは受け入れる事ができず、すぐに寝室から出て行ってしまった。

ロバート王は、アルトの亡骸を抱き締め、何度も何度も真っ白な頬をなでている。

ウィルはというと、ほとんど放心状態でアルトを見ようとしなかった。部屋の片隅でうずくまり、アルトとの思い出をおもいだしながら悲しさをまぎらわしていた。

何日かは、村の悲しみは癒えることはなかった。

もう一つのお話（前書き）

もしよろしければ、評価、感想を書いていただければ嬉しいです☆
では、二人の過去へと足を踏み込んでください。

もう一つのお話

ラスト国では、だいたい受け継がれている話があった。母様に聞かされた話を、アルトはウィルにも一回だけ話したことがあったのだった。

「昔々あるところに、魔女達が山奥で住んでいました。魔女達は、白真導師、黒真導師と二つの力に別れていました。しかし、白真導師は黒真導師の力をいよいよいに見ていませんでした。それは、黒真導師の魔力には邪悪な力が満ち溢れていたからなのです。なので、白真導師は邪悪な心がでないうちに、黒真導師の力を封じ込めてしまいました。けれど、一人の少女は逃げ惑い封印をさせてくれません。しだいに彼女の体は邪悪な闇にそまり、人々の命を食らうようになりました。魔法使い達だけでは手がおえなくなり、ドラゴン達に力をかしてくるよう頼みました。魔法使いとドラゴンは力をあわせ、彼女の体ごと暗い扉のなかに封印してしまったのです。」

「これは本当のお話なの？」

「いいえ。これはたんなる、作り話よ。でも、黒真導師がいたのは本当だったらしいけどね」

「この島は、ずっとまえからお空に浮かんでたんじゃないんだね？」

「そうよ。魔女達は普通の人間達と暮らせなくなってしまったの」
悲しそうに、アルトは灯のロウソクを吹き消す。

部屋の中が真っ黒になってしまった。

「どうして、一緒に暮らせなくなってしまったの？」

暗闇で見えないアルトの顔をウィルは探す。

「魔法使いの力が怖くなってしまったんじゃないかしら？どっちにしても、人間と魔女は住む世界が違っていたのかもしれないわね。だから、ずーと昔に魔女とドラゴンが力を合わせて島二つを空に浮かせたって、私の母様が言ってたわ」

「ふーん。でも、ドラゴンは悪いやつなんでしょ？」

モゾモゾと体を動かし、ウィルはアルトの体にピッタリくつついた。アルトはそんなウィルを優しく包む。

「そうね。悪いやつよね」

うかないアルトの声。

「さあーもう寝ましょ。明日は村の子供達と森まで遊びに行く約束をしているんでしょ？」

「うん。グリム達とも約束してあるんだ。土に種を植えるんだよ。

私はお花の種をたくさん埋めるの」

はしやぎながらウィルは言う。

「ウィルが植えた花が、森中にたくさん咲いたらきつと綺麗ね」

「そしたら、パパとママとラズラスと一緒にピクニックに行こうね」

アルトは何も言わず、ただウィルに笑いかけた。

この時から、アルトはもう自分の死があとわずかと迫っている事を知っていたのだった。

第3章 謎の女

一週間後、金縛りの術をかけられた箒が、やっとのことで森から城へ戻ってきた。

城のなかは静まり返り、箒はウィルの部屋へと向かう。

夜だというのに部屋のなかは真っ暗で、月の明かりが唯一の光だった。部屋の隅でうずくまっているウィルを、照らしている。

「ウィル？」

箒の言葉にも、返事を返してくれない。

ゆっくりとウィルに近づく。

急にウィルの手がのび、箒を自分の胸に引っ張ると泣き始めた。どのくらいウィルは泣いていたのだろう。

声は掠れ、体からも弱い魔力しか感じられない。

ウィルの隣には、アルトの氷の杖がおかれている。

「アルト王女様」

窓から見える星空に、箒は語りかけるように心のなかで問い掛けた。

——本当にいなくなってしまったのですね——

モサモサとした頭を、箒はなでるようにしてウィルの肩に何度も：何度もすり寄せた。

それからというものの、ウィルは人が変わってしまったかのように、毎日さぼっていた魔法攻撃呪文を魔力が続く限り練習した。

アルトの形見の一つである、あのペンダントを首につけて。

双子のドラゴンはというと、村に身内がないため、城でウィルの用心棒として育てられていた。

姿は魔女の人間のままなので、皆はドラゴンの子供とはきづいていない。

この二人は名前もなにもつけられていなかったので、ダニー・ドラとコール・ドラとウィルが名付けた。

と言っても、顔がそっくりなためどっちがどっちなのかわからなくなってしまう。

短い銀色の髪は鱗のように堅く、ダイヤのようにキラキラとした大きな赤い瞳。

白いローブに身を包み、いつもウィルの側をくっついて離れない。ドラゴンの時はまったくわからなかったが、魔女の人間にかえてみると、ウィルと同じ年ぐらいだった。

顔はそっくりなのに、性格は全然違うので、ウィルは性格だけでいつも二人の事を判断している。

最初は難しかったが、今では簡単に見分けられるぐらいになった。十四才の秋。

大人っぽく成長したウィルは髪が腰までのび、大きな一つの三つ編みでしぼり、長い耳にはたくさんのピアス。背中にはアルトの杖を背負っている。

ローブではなく、白と青い刺繍がはいった巫女のような服そうदैいつも出歩いていた。

アルトが亡くなってから、ウィルと村の者達はこつこつとアルトの銅像を作っていた。

この日やっとアルトの銅像が完成し、村の中心部へと運ばれ飾られた。

「いつもアルト王女様が、ここにいるとおもうと安心できるわい」手を合わせ、お婆がアルトの銅像を見上げて言った。剣を空高くかざし、アルトの目線なスカイスネイク国がある方向を向いている。ダニーとコールも手を合わせている。

村の者達もいっせいに両手をあわせ、頭を下げていた。じつとウィルは銅像のアルトを見た。

とてもアルトにそっくりで、今にでも村の者達に笑いかけてくれるようだった。

「ママ、あれから数十年がたちました。ママが死んでからというものの、ドラゴン達はこの国に足を踏み込むことはありません。もう戦

争は終わったの？このまま平和な日々がつづくとおもう？ママ―
心のなかで、ウィルは銅像に話しかけた。

だが、いくらアルトに似てても言葉までは交わしてはくれない。

「ウィル？顔色が悪いぞ」

ダニーが、一言も口をひらかないウィルの顔をのぞきこむ。

いつのまにか、村の者達はいなくなり、三人だけが広間に残っていた。

「大丈夫。ちょっと疲れてるだけ」

「城に戻って休んでたほうがいいよ」

とコール。

銅像から目を離し、ウィルは歩き出した。

二人もついていく。

「これから魔法攻撃の練習があるから。二人は部屋に戻っていいわよ」

「ま、まだ練習するきか。お前、もっと自分の体のこと考えたらどうなんだ」

飽きれながら、ダニーはウィルの手首をつかむ。

それだけで、ウィルはバランスを崩し倒れそうになった。

コールが慌てて後ろにまわりこみ、ウィルの体を支える。

船酔いでもしたかのような気持ち悪さがする。

「こんな体で練習なんかできないよ。さあ―城に戻ろ」

優しくコールが言った。

支えてくれているコールの腕をはらい、ウィルはまた歩き始めた。

苛立ちながらダニーは、コールの背中をポンツと叩き、ウィルの後ろを歩く。

「倒れたらどうするつもりなんだ？」

石ころを蹴飛ばしながらダニーが聞く。

「そのときに休むわよ」

「魔力が落ちてるの、ウィルもわかってるでしょ？限界な時に練習しても、自分の体を傷つけるだけだよ」

とコール。

「これ以上人が死なないですむなら、私の体なんてどうなろうとかまわない」

つんけんに、ウィルは答える。

「ああそうかい。もうかつてにしろ。コール行くぞ」

ついに怒ったダニーは、後ろを向き歩いていつてしまった。

コールはおろおろしている。

「コールもいけば」

冷たくウィルが言った。

「ああは言っても、ウィルのこと心配して言ってるんだよ」

足早に歩いて行くダニーの背中を見て、コールは言う。

ウィルはチラッと後ろを向いた。

ほとんどダニーの姿は見えない。

「わかってる。でも、じっとしてられないの」

何かをしていないと、ママの思い出ばかりが頭に浮かぶ。苦しくて、頭がおかしくなってしまうようになる。

うつむいているウィルの頭をコールは優しくなでた。

「一人で抱え込まないで。もっと僕たちを頼ってよ。だから無理しすぎちゃうんだよ」

お見通しといわんばかりに、コールはウィルの額にでこぴんする。

「僕はダニーを追いかけるけど、練習はほどほどにね」

そう言うと、コールは走ってダニーの後を追いかけて行ってしまった。でこぴんされた額をウィルはさする。

どうしても素直になれない自分が嫌になる。小さい頃は、あんなにも素直だったのに。

少しのあいだコールが見えなくなるまで、ウィルは立ち止まっていた。魔法攻撃の練習場所は、いつも森で行われていた。

ウィルは箒を使わず、のんびりと森へ向う。

あちこちで、いい匂いがしている。

店をだしている魔法使い達が、歩いているウィルを引き止めていく。

「ウィル姫。大きくなりましたね。若かったアルト王女様に、だんだんと顔が似てきて」

赤い髪をした魔女のおばちゃんが、誇らしげにウィルを見る。

「ありがとうございます」

ニッコリと笑うウィル。「少しお疲れのようですが大丈夫ですか？」心配そいに、おばちゃんが言う。

「私達はいつも一緒ですよ。アルト王女様が亡くなられてから、ウィル姫の笑顔が少なくなったのは、村の者皆ご存じです。でも一人ではありません」

おばちゃんのまわりにいる村の人達数人が頷く。

「まだ若いのに、辛いことを経験して寂しいだろう。けどな、俺たちもいる事を忘れてはいかん」

亭主が腰に手をあて、ウィルに言った。

嬉しさのあまり、ウィルは涙目になった。

元気がないこと、皆知ってたんだ。

「ありがとうございます」

皆にお辞儀をし、ウィルは逃げるようにそこから立ち去った。

後すこしで泣くところだった。

橋を渡り、森の隅にはたくさんの花々が咲いていた。これは全部、ウィルが丹精込めて育てた花達だった。ママにも、見せたかったな。花が咲いたら、皆と一緒にピクニックに行こうと約束をしたのに、結局その夢は叶わなかった。

木々の葉っぱは赤く色付き、動物達が冬にむけて、食料を集めている姿があった。

ウィルはようやく森の中心についた。

芝生を刈っているグリム達のなかに、ラズラスもいる。

大きなハサミを両手で抱え、ラズラスが一緒になって芝生を刈っていた。

グリム達が見慣れないハサミに、ちよっとうろたえている。なんとなく、ウィルはその光景が面白くて、じーっと見入ってしまった。

った。

「ウィル」

ようやくラズラスがウィルの姿に気付いた。頬についた土を袖で拭、ハサミの魔法を解く。

ウィルはラズラスの元へと行った。草刈の手を止め、グリム達がこちらに頭を下げてきた。

「ラズラスさん。攻撃魔法をするのはかまわないが、この前みたいに芝生をめっちゃめっちゃにされちゃ困りますよ」

白い髭をはやしたグリムが、ラズラスに言った。

ラズラスは頭をかきながら苦笑いをした。

「ごめんなさいね。今日は、そんなことがないようにきおつけます」
そう言うなり、ラズラスは腰にまいてあった杖をすかさずもち、ウィルめがけて攻撃魔法を解き放った。

驚いて、ウィルはなんとか魔法をよけたが、服の先が焦げてしまった。

「不意をつくなんて卑怯です」
とウィル。

「あら、本物の戦いなんて、いつどこで攻撃されるかわからないのよ」

鼻でラズラスは笑う。

グリム達はさっさと芝生を刈るなり、森の中へと姿を消した。
三つ編みの髪が風で揺れる。

背負っている杖を引っ張りだし、ウィルは体勢を低くし構えた。

新品の服なのに。穴があいてしまった服を見て、ウィルはちよつとショックだった。

「こないの？」

杖を肩でコンコンと叩き、ラズラスが笑って言った。両目を閉じ、ウィルは集中した。

手に持っている杖が、ドクンツと脈をうつ。

「いきます」

地面をおもいつき蹴りつけ、前かがみのままウィルはラズラスに突進する。

ラズラスが呪文を唱え、杖を地面に差し込んだ。地鳴りとともに、地面は真つ二つに割れ始める。

足を止め、ウィルはよけると同時に、ラズラスに向って雷魔法を放つ。電気の弓がラズラスめがけて飛んでいった。

だが、そこにはラズラスの姿はない。

たしかに、あそこにいたのに。

「遅いわよ」

いつのまにか、ウィルの背後にラズラスが立っていた。

体勢をととのえ立ち上がったが、ラズラスの杖はウィルの額を捕らえていた。

さっき放った雷の弓が木に刺さり、シューといって魔法が解けてしまった。

本当なら黒焦げになるはずなのに。

「魔力の使いすぎね」

額にむけていた杖をラズラスは腰にしまった。

たったのあれだけの魔力で、ウィルはもう息が激しくなっていた。

「まだ、大丈夫」

「これ以上やっても、時間の無駄よ。城に戻って体力をつけておきなさい」

「ラズラス：お願いもう一度」

立ち上がった瞬間、ウィルはフツと意識がふっとんできました。

体は石のように重く、自分の魔力の鼓動が弱っている音が聞こえる。

誰かが私の体をだきかかえてくれている。

ラズラスの魔力の気配じゃない。

もうそんなことはどうでもいい。

目を閉じているだけで、こんなにも心地よかったつけ？

ウィルは久しぶりに、深い眠りについた。

夢

自分の意志ではないのに、体がかってに歩いている感覚がした。

最近、ちよくちよく見ていた夢だ。石でできた長い廊下。クモの巣があちこちの天井に、飾りをつけるかのように張り巡らされている。火がついローソクを片手に、どんどん奥へと進む。

すると、急に視界が止まる。

なぜか壁へと向きが変わった。

壁には、古い絵が書かれている。

箒にまたがっている魔法使い達。それにドラゴン。

空を飛んでいる姿のようだ。

まだまだ絵は奥までつづいている。二つの島に、ドラゴンと一人の魔法使いが一つの杖を握りあい、大きな光を放っていた。真ん中には、丸い玉が書いてある。次の絵は、逃げる魔法使いをドラゴンと杖を持った魔女が追いかけている姿。

と、ここで絵は途切れている。

続きがあったのかもしれないが、壁は崩れわからない。

また、足がかってに歩き出す。

奥に行くにつれ、空気が湿っぽくなり、床が水で浸りはじめた。

前にはたくさん根っこがはえ、これ以上前に進むことができない。

でも、根っこの先には扉のようなものが見える。

大木のような絵も見える。

「もう少し」

ウィルは驚いてローソクを落としてしまった。ジュツと水で火が消えた。

だが、根っこの先で光が差し込んでいるので、真っ暗にはならなかった。

「もう少し」

また聞こえた。

「誰かいるの？」

恐る恐るとウィルが聞く。

「ずっと待っていた。満月の夜を。もう少しだから、おまちなさい。ウィル・パキンソン」

不思議と嫌なかんじはしない。

柔らかいその声が、ウィルには居心地がよかった。

なんとかして、根っここの奥へと行きたい症状にウィルは襲われた。根っこに手を伸ばし、勢いよく横に引っ張る。

おもったよりも根っこは弱く、二つに別れた。ますます光が強くなる。

ウィルは強引に体を押し込み入ろうとした。

そのとき、扉に光り輝く杖が刺さっていた。

水でできた杖に亀裂がはいり、今にでも砕けてしまいそうな感じだ。ウィルは氷の杖に見覚えがあった。というよりも、アルトから受け付いた杖とそっくりだったのだ。

「どうして、こんな所に杖が」

輝いている杖にウィルは触れた。

瞬間、杖は赤い光を放ち砂のように消えてしまった。同時に扉がゆっくりと開かれる。

扉のなかは真っ白な空間でおおわれ、巨大な十字架が一つたっているだけだった。

十字架に、誰かが張り付けにされている。

頭をさげたまま、動かない。

寝息の音が、かすかに聞こえる。

ウィルの体中に鳥肌がたった。

ここから逃げなきゃ。

とはおもうものの、体はゆうことをきいてくれない。強い魔力が、ウィルの体を引き寄せる。

「ウィル、次はあなたが国を守るばんよ」

「ママ……………」

第3章謎の女前半2

アルトの声がしたかとおもうと、いつのまにか夢から覚めていた。誰かがウィルの手を握っている。

ダニーとコールが、ウィルの手を握り締め眠っていた。どれくらい眠ってたのかしら。

満月がのぼり、空にはたくさんの星が満開だった。

ベットの隣りには、杖と箒がおいてある。

「ウィル、疲れはとれたかい？」

寝てたとおもっていた箒がしゃべった。

「だいぶんとれたわ」

毛布を二人の体にかけてあげ、ウィルは言った。

「うなされていたようだったけど」

「ちょっと嫌な夢をみちゃったの」

「どんな？」

と箒。

話そうとしたが、なぜかさっきまで見ていた夢の事が思い出せなかった。

「なんだったつけ？」

首をかしげ、ウィルはうなった。

「ぼけがはじまったか」

ゲラゲラ笑い、箒が言う。

「本当に思い出せないんだって」

ムツとしてウィルはベットからおりた。

翌朝、ウィルはほとんど魔力が回復していた。

ダニーとコールを起こし、ウィルは寝巻から巫女の服に着替え、朝食を食べに下へとおりることに。

二人は大あくびしながら、ウィルの後につづく。

すると、階段の方でボケーと外を見ているロバート王の姿があった。顔はやつれ、目は真っ赤になっている。

アルトがいなくなってから、ロバート王は笑顔すらなくなってしまう。

ロバート王は、村にできたアルトのどうぜを眺めている。

「おはよう、パパ」

足を止め、ウィルは少し離れた所で挨拶した。

しゃがみこみ、二人もロバート王に挨拶の礼をする。ロバート王は、ウィルに目線をかえた。

笑いもしないロバート王の顔が、ウィルには辛かった。

「おはよう。朝食ができてから、一緒に食べないか？」

「う、ううん。今日は村で食事をしようってことになってるから」
そう言うと、ウィルはロバート王の顔も見ず、まだしゃがみこんでいる二人の腕を持ち足早に去った。

がっかりと肩を落とし、ロバート王はまたアルトの銅像に目を向けた。

「なんで一緒に食べてあげないんだよ」

腕を引っ張られながら、ダニーが聞く。

ウィルは何も言わず、門へと急ぐ。

「パパさんは、奥さんの死で悲しんでいるんだよ。それを支えてあげれるのは、ウィルしかいないのに」

つぶけてコールが言う。

「だって…」

ようやくウィルが口をひらく。

「何を話していいのかわからないのよ。会話の中心には、いつもママがいたから。ママが、私達をいつも笑わせてくれてたから」

うつむきながら、ウィルは小さい声で言った。

二人は顔を見合わせ、それ以上の事は何も言わなかった。

大切な人が死ぬ悲しみなど、二人にはわからない。

だから、ウィルの苦しみもすべて受け止めることはできなかった。
会話なしの三人はようやく村についた。

市場の道は、たくさんの人達で賑わっている。
丸々一匹の豚をぶらさげ、値切っている人や、集団で集まり今日の
晩ご飯の話をしている人達。

三人は色々な人達に押されは、前に進みを繰り返していた。

「ちょっ、おぼはん俺の足踏んだ！」

顔をゆがめて、ダニーが横にいるおぼさんに怒った。

「ちゃんと前みて歩かないほうが悪いのよ」

そうおぼさんは言うのと、人込みの中へと埋まって行った。

ダニーは声にならない怒をコールにぶつけた。

バシバシとコールの肩を叩いている。

呆れた顔をウィルはダニーに向けた。

「こんな人込みじゃ、踏まれるのはしかたがないわよ。コールも何か言ってあげなさいよ」

叩かれているコールは、ただ笑っているだけだった。やっと人込みが少ない場所へとでた三人。

真ん中には噴水があり、水色の真珠のようなものがキラキラと空に向って吹き出ている。それを丸い円のように囲みながら店が並んでいる。

「何食べる？何食べるんだ？」

さっきまで機嫌が悪かったのが嘘だったかのように、ダニーは涎をローブで拭き取りながら、辺りをキョロキョロしながら聞いて来る。

「コールは何が食べたい？」

コールは慎重に選ぼうと、念入りに一つ一つ店を見ていた。

「おーい！これめっちゃうまいぞ」

大声で叫んできたのはダニーだった。

トウモロコシを五本口に加えて、先に食べている。

人に聞いておきながら、もう自分で決めてるじゃないの。

「ウィル姫様。珍しゅうございますね、今日は城で朝食をお食べに

ならなかったのですか？」

やせ細った体をクネクネさせ、こちらに歩いてくるウィルに聞いてきた。

「たまには、村の人達が作るご飯が食べたいとおもいまして」とウィル。

「姫様ならいつでも大歓迎でございます。好きなだけ食べてくださいな」

「まじで！全部食べていいのか？」

目をキラキラ輝かせてダニーが言う。
ちよっとたじろぎつつ、亭主は頷く。

「コール！はやくこいよ。全部ただだってさ」

店に並べられてある食べ物を、これでもといわんばかりに口の中に入れ込みはじめる。

コールもダニーにつづけて口のなかに放り込む。

「ちよっとは遠慮しなさいよ」

ウィルはダニーのローブを引っ張った。

「お前も食えて」

骨つき肉をつかみ、ダニーはウィルの口のなかに押し込んだ。

「あっ。おいしい」

こんだけおいしければ、くいつくはずだわ。

あっという間に、店の物をたいらげ、ダニーとコールはパンパンになった腹をさすり地べたに寝転んだ。

「うまかったぜ。いやぁー、もう動けねえー」

とダニー。

全部食べるとおもっていなかった亭主は、苦笑いをしている。

「喜んでもらえてよかったですよ」

ウィルは背中に巻いてあった杖を取りだし、杖の先を自分の手のひらにあて、コンツと叩いた。

すると、十枚もの金貨が現れた。

「ご馳走さまでした。少しですけど、受け取ってください」

金貨を亭主に渡し、ウィルはニツコリと笑った。

貰えるとおもっていなかったのか、亭主の顔から笑顔があふれだした。

「また、いつでも来てください」

「二人とも、お城に戻るわよ」

杖を背中に戻し、ウィルは二人の横腹を蹴った。

めんどくさそうに二人は立ち上がり、土がついたローブをはらう。

そのとき、さっきまで天気がよかった空に、黒い雲が現れたはじめた。ゴロゴロと空が唸っている。

「一雨くるかしら」

空を見上げ、ウィルは言った。

「でも、今日は天気のはずだよ」

コールがそう言った瞬間、スコールが降ってきた。

激しい雨が地面に打ち付けてくる三人はあっというまに、びっしょりになってしまった。

「どこかで雨宿りしましょ」

あまりの激しい雨に、前もうまく見えない。

なんとか三人は適当に走り、雨宿りができる場所を探した。

村の者達も両手を頭にのせ、走り回っている。

なかなか、雨宿りができる場所が見つからない。

と、どこからか歌声が聞こえてきた。

とても美しい歌声だ。

ウィルは足を止めた。

驚いて二人も足を止める。

「どうしたんだよ。はやく雨宿りができる場所を探さないと」

雨が口のなかにはいつて、ダニーはうまくしゃべれなかった。

「まって。誰かが歌を歌ってるの」

村の皆も聞こえるのか、雨宿りの事を忘れ、歌声に聞き入っている。

空から？違う。村全体から響き渡っている。

そこら辺を見ても、誰かが歌っているかんじはしない。

柔らかい歌声は、しだいに遠くなっていく。

につれて、雨もしだいにやみ、歌声は聞こえなくなってしまう。真っ暗な雲は風にもつていかれるように、太陽の光をだして流れて消えてしまった。

ウィルと村の者達は、歌声はもう聞こえないのに、空を見上げてうつとりとしていた。

コールがウィルの肩をつつく。

驚いてウィルは空から目を離す。

「どうしたの？」

とコール。

「すごく綺麗な歌声が聞こえてきたの。貴方達も聞こえたでしょ？」

興奮が止まらなかった。

あんなにも綺麗な声、聞いたことがない。

村の皆も、騒ぎだした。

だが、二人は顔を見合わせて肩をすくめている。

「俺達には聞こえなかったぜ」

「なんで？」

それを聞いて、ウィルは聞き返した。

「なんでって言われても。僕達には全然」

どうして私達には聞こえて、ダニーとコールには聞こえなかったのかしら。

不思議におもいつつも、三人は城へと帰ることにした。

門のまえでラズラスが立っていた。空をじっと見上げ動かない。

悪ふざけでダニーがラズラスに向かって突進しようとしたが、ラズラ

スはすかさず杖をとり、ダニーに向けた。

目線だけは空だけを見ている。

「じょ、冗談だって」

杖の先の向きを変えながらダニーが笑って言った。

「ラズラス」

心配そうにウィルは話しかける。

「ウィル、あなたにも聞こえた？」

「ええ。村の全員が聞いているわ。なんだったの？」

杖をしまい、やっとラズラスがこちらを向いてくれた。

「古い呪文の歌のようね。何もなければいいんだけど」

「僕達は聞こえなかったです」

コールが小さく話題にはいつてきた。

「魔女用の呪文だから、貴方達も聞こえていいはずよ。もちろん、ドラゴンだけは別だけど」

チラッとダニーとコールを見てラズラスが言う。

最近、ラズラスが二人の事を疑っているのは、めにみえてわかって
いた。

「さっ、二人とも行きましょ」

会話を終わらせるために、ウィルは二人の背中を押して、その場か
ら去ろうとした。

「ウィル」

ラズラスの声にドキッとした。

「な、なに？」

声が裏返ってしまう。

「パパ様と、少しはお話してる？」

急にそんな事を聞いてくるとはおもわなかった。

下をむいたまま、首を横にふった。

「そう。パパ様も、あなたと同じ気持ちでいるとおもうわ。アルト
が死んで、あなたとどう会話をしていいのかわからないのよ。でも
ウィル。アルトのぶんまで、パパの事愛してあげなきゃ駄目よ」

「うん。わかってる」

涙がこぼれそうになる。

気持ちではわかってるのに、行動にうつせない自分がむかつく。

私だけが悲しいおもいをしてるわけじゃないのに。

そんなウィルを、ダニーは自分の胸に押しつけた。

「ラズラス、あんまウィルをいじめるなよな」

「いじめてるわけじゃないわよ。人聞きの悪い」

ムツとしてラズラスが言う。

ダニーの鼓動がドクドクと聞こえ、ウィルはなんだか恥ずかしくなった。

「離して」

とウィル。

「おっと、ごめん」

両手を上にあげ、ダニーは一步後ろにさがった。

顔が真っ赤になって熱い。

隣りではコールがニヤニヤしてこちらを見ている。

「わ、私さきにいつてるから」

ウィルは走った。

「あーあ。人のこと言えないじゃないの」

腕組みをし、走っているウィルの背中を見つめながらラズラスが意地悪げに言う。

困ったようにダニーは自分の固い頭をかいいた。

コールは口に手をあて、笑いを必死に我慢している。

第三章謎の女後半

部屋につき、ウィルはドアに鍵をかけた。

まだ、ダニーが抱き締めてくれた温もりが体中に残ってる。

胸のドキドキが止まらない。

背中に巻いた杖をとり、ベットの横においた。

箒のあくび声がした。

「どうしたウィル。顔が真っ赤だぞ」

「なんでもない」

ベットに飛び込み、ウィルは毛布にくるまった。

いつのまにか、ウィルは眠ってしまっていた。

起きたときには、もう外は真っ暗で満月の光が差し込んでいる。

横にいた箒は、どこかに出かけてしまったのか姿が見当たらない。

背伸びをし、ウィルは開けっ放しになっている窓を閉めようと起き上がった。

と、またあの歌声が聞こえてきた。とても近い。

ウィルは窓へと駆け寄った。

ベランダの方に人影が見える。

声の持ち主はこの人だった。

「あ、あの」

唾を飲み込み、ウィルは勇気をふりしぼって話しかけた。

歌声がぴたりとやみ、その人の顔を映し出す。

綺麗な顔立ちに、真っ白な肌。地面までつく長いブロンドの髪。黒

いドレスを着て、右手には二メートルほどある杖を持っている。

杖も黒く、杖の真ん中には赤い玉が差し込んであった。

人形のような顔立ちの女性は、ウィルにニッコリと笑いかけてきた。

つられてウィルも笑い返す。

「驚かせてごめんなさい。私、この景色をみながら歌うのが好きなの」

柔らかくて優しい声は、手荒に扱ったら壊れてしまいそうなくらいだった。

「あのときの歌声もあなただったんですか？」

とウィル。

フワッと女の人の体が浮かび、ウィルの隣りに座ってきた。

近くでみると、ますます綺麗な人だわ。私が男だったら、そっこう一目ぼれね。

などと考えているのがお見通しなのか、女の人がクスクスと笑った。恥ずかしくなり、ウィルはうつむいた。

「私の名前はアダン・モダード。あなたが、ウィル姫様よね？」

ウィルは頷いた。

「私の母様もドラゴンに殺されて一人ぼっちになってしまったの。だから、村を見下ろすと一人っけがしないのよね。皆が側にいてくれてるようなきがして」

悲しそうな瞳で、アダンは村の明かりを見た。

ブロンドの長い髪が風に揺れ、月の光でキラキラしている。

まるで、宝石を頭全体にかぶせているようなかんじだ。

「満月の日って私好きなの。力がわいてくるようなきがしない？」

呆然とウィルがアダンに見入っているなか、アダンはニツコリと笑って聞いてきた。

ウィルはハッとして、おもわず頭を何度も縦にふった。

口をおさえ、アダンはクスクス笑う。

とても悪い人にはみえない。むしろ、魔法使いだというのに村の者達よりも魔力が弱いのがかんじられる。そのとき、誰かがドンドンとドアを叩いた。

「ウィル。なんの騒ぎだ」

ロバート王だ。

ウィルはアダンを見た。

「私は大丈夫よ。一度、王様ともおめにかかって挨拶をしたいわ」それを聞き、ウィルはパチンツと指を鳴らした。

ドアの鍵がカチッとあいた。「無事か！」

大きな斧をもったロバート王が、けっそうかえてはいつてきた。

驚いた顔で、二人はロバート王を見る。

無事なウィルを見て安心したのか、ロバート王はへたりこんでしまった。

「何かあったかとおもったわい」

息切れをし、斧を床においてロバート王は一息ついて言った。

ようやく横にいるアダンの姿にロバート王はきづいた。

あまりの美しさに、頬を赤らめロバート王は硬直してしまった。

「アダン・モダードさんよ、パパ」

ウィルが紹介した。

黒いドレスの端を両手でつかみ、アダンはお辞儀する。

やっとロバート王は正気に戻り、慌てて立ち上がった。

「初めましてロバート王」

とアダン。

フワッと体が浮かび、アダンはロバート王に近付くなり、杖を一振りして挨拶をした。

一瞬、アダンの杖からベギス王のような強い魔力が感じた。

そんなはずがない。あんな強い魔力、アダンから感じるはずがないわ。まだ疲れがとれていないのかしら。

ウィルは首をふり、自分に言い聞かせた。

いつのまにか、ロバート王とアダンはいい雰囲気包まれていた。笑顔をいっさいむけなかったロバート王の顔から、はちきれんばかりに口元を緩め、楽しそうに話している。

私にすら、あんな笑顔むけてくれたことなんてなかったのに。

ウィルはちよつと複雑な気持ちで二人を見ていた。

ようやく自己紹介などの話しが終わったのか、ロバート王はウィルの存在を思い出したかのようにこちらを見た。

「アダンと少し話しをする事になったから、お前は寝ていなさい。さあー行こうか」

小さいロバート王は背伸びをし、なんとかアダンの手をつかんだ。うかない顔をしているウィルに、アダンは申し訳なさそうにお辞儀をし、ロバート王と一緒に部屋から出て行ってしまった。

一人取り残されたウィルは、少しのあいだドアを眺め立っていた。

「いいのよ別に。パパが元気になったんだもの。私は別になんともないわ」

ついには部屋の中をウロウロしだし、ウィルは独り言を呟く。

「でも、でもよ。今日あったばかりなのに、あんなにデレデレしなくてもいいんじゃない？けど、しょうがないのかしら。アダンは美人だし。でも…でもよ」

後ろを向いたとき、さっきまでいなかった箒が立っていた。

ウィルは驚いて後退りした。

「独り言ですかいいね」

顔はないが、ニヤツと笑っているのは目に見えてわかった。

「どこに行ってたのよ。いるなら、いるってちゃんと行ってよね」

「一人芝居が忙しいとおもったんだよ。所あの女は誰なんだ？」

「そこまで見ていたのね」

ため息をつき、ウィルはベツトに座った。

「村の人よ。さっき話してた所にパパがきて、アダンをもってっちゃったの。今ごろデレデレしているにちがいないわ」

「あんな美しい女性、村にいたっけな？」
と箒。

「知らない。もう私寝るから」

毛布を引っ張り、頭ごと被せウィルは丸まった。

静かにしていると、下にいる二人の笑い声が聞こえてくる。

なによ。パパのエロ親父。

両手で耳を押さえ、ウィルは

「あーあー」

と言いながら、下の声が自分の耳に聞こえないようにした、

それからというもの、アダンは毎日のように城にきては、ロバート王と仲良く食事をし、そのあとはお決まりの森への散歩。美しく、優しいアダンは村の者達からも評判がよく、もしかしたらロバート王と結婚をするんじゃないかという噂もでてきた。

仲良く城の外で食事をとっている二人を、ウィルは自分の部屋から除いていた。

「一緒に食べればいいのに」

ウィルの後ろから顔をだし、コールが言った。

「別に。私がいてもどうせ邪魔なだけよ」

ピシャッと窓を閉め、ウィルはカーテンもしめきった。

椅子を上下に倒したりして、ダニーは眉間にしわを寄せながら遊んでいた。

「本当に二人はくつついちゃうのかな？」

頭の後ろに両手をくみ、ダニーが口をひらく。

近くにあった本を、ウィルはおもいきりダニーに向って投げた。

見事、本はダニーの顔面に命中し、椅子からひっくりかえってしまった。

コールがあたふたとしている。

乱れた髪をととのえ、ウィルは大きく息を吸った。

「それもいいとおもうわ。そしたら、新しい王女様の誕生だものね。優しくて、綺麗で」

「じゃー、なんで本を投げてきたんだよ」

真っ赤になった鼻をさすり、ダニーは椅子にすがりながら立ち上がった。

「なんとなくよ。なんとなく」

苦笑いしてウィルは言う。

「本当は嫌なんでしょ？」

とコール。

二人がウィルを見る。

「そんなことないわよ。なんで私が嫌がるの。これでパパも元気になるんだったら、私も幸せだし、村の者達も新しい王女様ができて……皆ハッピーじゃない」

笑いながら、ウィルはコールの背中を叩いて言った。

「無理すんなって」

ダニーはウィルの頭をポンポンとなでた。

「嘘つくの下手だね。ウィルは」

コールも優しくウィルの頭をなでる。

しだいにウィルの顔が歪む。

ママに向けていた笑顔も、ママだけにしか言わない言葉も、今度はあのアダンにむけるかとおもうと、ウィルは悲しくてしかたがなかった。

笑って冗談を言おうとしても、ウィルはもう笑顔をつくれるほど余裕がなくなっていた。こんなにも優しくされたら、突っ張っていた心だって、安らぐにきまってる。

ウィルの瞳から涙がこぼれてきた。

「もし、もしあの人と結婚したらママのこと……皆忘れちゃうかもって不安なの。でも、パパが元気になってくれるんだったら、我慢しなきゃって」

涙が止まらない。二人とも泣いているウィルを見て、言葉がでないのか辛そうな表情だ。ダニーが優しくウィルを抱き締める。

もう片方から、コールもウィルを抱き締めた。

「皆忘れないよ。自分の命を犠牲にしてまで村を守ったんだよ」

「そうだぜ。もし忘れたやつが一人でもいたら、ぶん殴ってやる。だから、泣くな」

ウィルは二人の腕を握り締めた。

ママ。もし結婚する事になったら、私は素直に受け入れたほうがいいのかな？

ずっと二人は、ウィルが泣きやむまで抱き締めていてくれた。

久しぶりに泣きすぎたウィルは、疲れたのか二人の腕のなかでいつのまにか眠ってしまっていた。

ダニーはウィルを抱き抱え、ベットへと寝かせる。

頬にはまだ涙の雫が残っていた。

「ダニーはどうおもう？あのアダンって女性」

深刻な顔でコールが聞く。

毛布をかけ、ダニーはウィルの頬についた涙を拭ってあげた。

「俺てきには、好きじゃないな。てか、あんな強い魔力初めてだぜ」

「僕も。あの人がかきてから、僕達の体にも異変がおきてるし」

そう言うと、コールは腕を捲りあげた。

腕全体にドラゴンの鱗が、浮かび上がっていた。

「ウィルの魔法が解けてきたのか？」

とダニー。

「たぶん違うとおもう。これは一時的なものだけど。ダニー、僕すごく嫌な感じがするんだ」

「俺も。さすが双子だな。考えてることは全部お前といっしょだぜ。調べる必要があるな。アダン・モダード」

二人はローブの帽子をふかく頭にかぶり、ウィルの部屋から出て行った。

その夜、ウィルはロバート王に呼ばれ食事ルームへと足を運んだ。
あの二人が側にいないので、ウィルは心細かった。

もう、なんの話しをされるかウィルにはわかっていた。

十メートルもある大きなドアを押し開けると、アダン、ロバート王、それにラズラスが席についていた。

「さあーおいで」

ロバート王がアダンの隣りの椅子をひいてくれたが、ウィルは無視してラズラスの隣りに座った。

悲しげに、ロバート王は椅子を戻す。

長い真っ暗な杖を横におき、アダンはご機嫌のようだった。

歌を口ずさみ、ロバート王と手を握りあっている。

「話しというのは、もうわかっていとおもう。村の者達も噂をしているようだしな。その……つまりだな」

照れくさいのか、ロバート王は恥ずかしげにモジモジしている。

「ほら。ちゃんとやって」

肩てつつきながら、アダンがうながす。

ロバート王は、コホンツと咳き込んだ。

「結婚をすることになった。式は明後日やる予定だ。ウィル、アダ
ンがお前の新しいお母さんになるんだぞ」

ニツコリとアダンがウィルに笑いかけてきた。

美しく顔だが、ウィルはもう見とれる事はなかった。

「いいんじゃないの」

そっけない言葉をウィルはかえした。

「私はみとめません」

きつい口調でラズラスが答えた。

驚いた顔でロバート王はラズラスを見る。

ウィルも少し驚いた。

唇を噛み締め、ラズラスはアダンを睨みつけている。

「でも、私が反対したところで結婚はおやめにならないことは知っ

ております。けれど、私はアダン様のことを王女様とは認めません」
「ラズラス！」

バンッとおもいきりロバート王はテーブルを叩いた。

「お前が王女を決めるのではない。私が決めるのだ」

ラズラスは食事にも手を付けず、立ち上がった。

「わかっております。ですから、結婚もご自由にしてください。ですが、私はアダン王女様の命令にはしたがいませんから」

お辞儀をし、ラズラスはアダンをもう一回睨み付けると、出て行ってしまった。

息を荒くし、ロバート王はかんかんに怒っていた。

アダンが必死になだめている。

「私も自分の部屋に戻るから」

そう言い残し、ウィルはラズラスの後をおいかけていった。

少し走ったところで、ラズラスがいた。

「ラズラス」

「大人げないわよね。でも、私はどうしても認めることができないの。貴方のママが完璧すぎたからかな。アルト以外、認めることができないのよ」

後ろをむいたままだったが、ウィルにはラズラスが泣いているように見えた。

私よりも、長くママといたのはラズラスだもんね。私よりも、もっともつと辛いのはラズラスだもんね。

とは、ウィルには言えなかった。

心のなかでおもうだけしかできない。

急にラズラスは背中をしゃきつとした。

「こんな姿アルトが見たら、怒られちゃうわね。しっかりしなさい！って。私は、皆に結婚式の準備を頼みにいつてくるから、ウィルは寝ていなさい」

「ラズラスは反対なんですよ？」

振り返るラズラスの笑顔は、無理やりでつくられていた。

「反対でも、結婚式の準備ぐらいはしないとね。ロバート王だって、悩みにやなんだ決断だと私はおもってるから」

「ラズラスは：ラズラスは、王女様が変わっても、ママのこと忘れて、薄れたりしないよね？」

耳をたれながし、ウィルはしゅんとなった。

「馬鹿なこと言わないの。ママと私は親友なのよ。親友のこと忘れたりしないわよ。大丈夫。大丈夫だからウィル」優しい声でラズラスは言った。

おもったとおりの答えがかえってきたのに、ウィルはどうしても不安だった。

ラズラスがママの事忘れるはずないじゃない。

「攻撃魔法の勉強は、少しのあいだお休みね。色々とバタバタするとおもうから」

「うん」

ウィルはラズラスと途中まで一緒に歩き、階段ぎわで別れた。

自分の部屋に戻ったウィルは、窓を開け、村から見えるアルト像を眺めた。

「ママ。ママがいまでも生きていたら、どんなに幸せだったんだろう」

首にぶらさげた氷のペンダントを握り、ウィルは窓に腰掛け、満月を見上げた。

明後日というものは、あっという間だった。

城はたくさんのお花で飾られ、森にいたグリム達も村にでてきている。

白いハトが空を飛び交い、花火も打ち上げられていた。
村の人達全員、城の外にあつまり、いまかいまかと待ち構えてる。

部屋で待機していたウィルも、真っ白なドレスに身を包み、窓から村の者達を見下ろしていた。
ダニーとコールも、ローブではなく、戦士のような服装に着替えている。

「動きにくいな」

首のあたりを引っ張りながら、ダニーが苦しそうに言った。
ウィルは黒いリボンを、箒の先につけてあげていた。

「ついに結婚式なんだな」と箒。

「ええ。そうね」

うかない声でウィルは言う。

結婚式の定番の鐘が外から聞こえてきた。

魔法兵士が部屋まで呼びに来る。

三人と箒は、ロバート王たちがいる城の塔まで登っていくことに。
途中でラズラスと合流し、塔のてっぺんについた。
もうロバート王は村の者達との挨拶をすませていた。アダンはブロンドの長い髪の毛をいくつもの花で飾り、綺麗なウエディングドレスを着て立っている。

村の人達が歓声をあげた。

「ウィルもくるんだ」

ロバート王に手を引っ張られ、ウィルはしかたがなく前出る。

黒豆のように見える村の者達の頭が、下でうごめいていた。

年老いたグリムがハトの背に乗って現れた。

手には、宝石がたくさんついた王冠を持っている。

その王冠を、グリムはアダンの頭にのせた。

また村の者達が歓声をあげる。

アダンは嬉しそうに、かがんでロバート王の頬にキスした。

ロバート王は頬を赤らめ、照れている。

「新しい王女様の誕生だぁー！！」

村の者達が声をそろえて叫んだ。

ダニーとコールが、その声にあわせて、口笛を吹いた。

魔法がかけられた白馬が後ろから現れ、ロバート王とアダンを背負って空へと掛けて行った。

ロバート王とアダンは顔を見合わせ、唇と唇をあわせた。こうして、ラスト国に新しい王女様が誕生したのだった。

第4章アルトの過去前半

結婚式は無事に終わり、夜になっても城中パーティーで賑わっていた。

そんななか、ウィルはこっそりパーティーを抜け、一人自分の部屋へと戻った。

賑わう村の者達。照れあう、ロバート王とアダン。

素直に受け入れる事ができないウィルは、見ているのが辛かった。

ウィルは寂しげに、窓側へと座り込む。

電気をつけなくとも、たくさんの星空で部屋は柔らかい光りで包まれている。

首につけているペンダントをとり、ウィルは遠くにあるアルトの銅像に視点を合わせた。

透き通る氷のペンダントが、歪みながらもアルト銅像を映し出していた。

瞳にジワジワと涙が溢れてきたとき、後ろから視線を感じた。

ウィルは驚いて後ろを振り向いた。

影で顔がわからない。

ペンダントを首につけなおし、ウィルは窓から降りる。

「誰？」

うわずったウィルの声。

「ごめんなさい。何度も呼んだんだけど、きづいてくれないから」

真っ白なウエディングドレスを引きずりながら、アダンがこちらに歩いてきた。

距離をおくように、アダンは少しウィルに近付くとすぐに足を止めた。

白く整った顔が、光りのせいでいっそう美しく輝いていた。

だが、その顔はともうかない顔をしている。

「ダニーさんと、コールさんが貴方を探していたわ。どうしてパーティーから抜けたの？」

「人込みが苦手なの。ちょっと新鮮な空気が吸いたくなくなっただけ」

重たい口調でウィルは答えた。

「ならいいんだけど……。ウィル、無理して私をお母さんとおもわなくてもいいからね」

ニツコリと笑ってアダンが言う。

「貴方のお父さんと結婚したからって、貴方のお母さんはアルト女王様一人だけですもの。だけどね、私と友達になってほしいの。なんでも話せる友達に」

以外の言葉に、ウィルは戸惑った。

その事でウィルがずっと悩んでいたのを、アダムは知っていたのだろう。

でも、アダムの言うとおり、そう思ってこれからつきあっていけば、少しは楽になるかもしれない。

ぎこちない笑顔を、ウィルはアダムにむけた。

「友達なら」
とウィル。

それを聞くなり、アダムは嬉しそうにこちらに近寄ってきた。

アダムはウィルの両手を取り、握り締めた。

「ありがとう」

その声からは、不安がやっと消えたように聞こえた。

私だけじゃなかったんだ。アダムも、私と同じで不安だったんだ。

手から伝わるアダムの温もりが、どこことなくアルトに似ていた。

これだけで、安心できる。

「じゃあー、友達の第一歩として、少しお話しましょうか」

無邪気な子供のように、アダムはウキウキしながら聞いてきた。

ウィルは頷いた。

ベットの横においてある二つの椅子を窓際に移動させた。

二人は椅子に座り、照れくさそうに互いにほほ笑いあう。

「私から質問してもいいかしら？」
とアダン。

「ええ」

「ウィルのお母さんは、どんな人だったの？」

やっぱり聞いてくると思った。

ウィルは幼い記憶を、懸命に思い出した。

「とても優しくして、いつも私の事を守ってくれたわ。魔力がとても強くて、知的なママだったけど、いつもどこか抜けてたの。でも、あの笑顔をみてるだけで、皆幸せな気持ちになっていたわ」
思い出し笑いをしながら、ウィルは語った。

「アルト女王様は、皆に愛されていたのね」

なぜか、二人の会話が途切れてしまった。

アダンは目を細め、窓から見えるアルト銅像を見ていた。

「ア、アダンはママに会った事はないの？」

なんとか話題を作ろうと、ウィルはアダんに質問した。

「小さい頃に、どこかで会った記憶はあるんだけど、はっきりとは

覚えていないの」
とアダン。

「アダンは、いつから一人ぼっちになったの？」

悲しげなアダンの表情に、ウィルはつついこんな質問をしてしまった。

ハッと両手で口を押さえたものの、言葉にだしてしまったのだから、もう遅い。

「ごめんなさい」

頭を下げ、ウィルは謝った。

眉間にしわを寄せ、アダンはなぜか考え込んでいた。

「実は私、幼い頃の記憶とか、いままで何をしていたのか、さっぱり覚えていないのよ。不思議よね」

「えっ!？」

ウィルは驚いて頭をあげた。

冗談かとおもいきや、そうでもないらしい。

本気でアダンは考え込んでいる。

「親がドラゴンに殺されたのは覚えているの。あと、私には妹がいて…それで…」

腕をくみ、アダンは体を揺らしながら唸っていた。

「記憶喪失ってこと？」
とウィル。

「なのかしら。きずいたら、貴方のお城のてっぺんで歌を口ずさんでいたの。けど、きつと平凡な生活をおくっていたんだとおもうわ」
心配そうにウィルは、アダンを見る。

記憶喪失だというのに、アダンはそこまで深く考えているようではなかった。

「強いよね、アダンは」

もし逆の立場だったら、私はきつとアダンのように笑っていられない。でも、もし記憶をなくせるのなら、あの時の記憶を消したい。そしたら、幸せな思い出だけが残るのに。

「ウィル」

アダンがおもいにふけているウィルの頭を優しくなでた。

「貴方のほうが、よっぽど強い心をもっているわ。お母さんが亡くなって、何もするきがしないはずなのに、貴方はそれでも国のために一生懸命頑張ってる。過去から逃げていない貴方はすごいのよ」

一瞬、アダンがアルトに見えてしまった。

ウィルは目をこすり、もう一度アダンを見たが、たんなる気のせいだった。

もう少しアダンと話したかったが、城中を探し回っていた兵士に見

つかり、アダンパーティーへと戻ることになってしまった。

ウィルも行くように言われたが、もう少ししてから戻ると兵士に告げた。

「今度、また時間があるときにゆつくりと話をしましょ」

そう言い残し、アダンは兵士と一緒に部屋から出て行った。

ウィルは、さっきまでアダンが座っていた椅子を、じっと見つめていた。

「見つけた！」

誰かに頭の後ろを叩かれた。

戦士のような服装は乱れ、ダニーとコールが息切れをしてウィルの後ろに立っていた。

もちろん、ウィルの頭を叩いたのはダニーだった。

「急にいなくなると心配するじゃんか」

喉にぴたったりとはりついていり服を引っ張ってコールが苦しげに言う。

「ごめんね」

といいつつ、ウィルはダニーの太股におもいきり蹴りをいれて謝った。

ドレスのすそがヒラッと舞う。

何かを言おうとしていたダニーは、痛さで座りこんでしまった。

コールが苦笑いしながら、ダニーの背中をさする。

「誰かと一緒にいたの？」

ウィルの前にある、もう一つの椅子を見てコールが聞いた。

「アダンと少し話をしていたの。自分の事、お母さんとおもわなくてもいいから、友達になってほしいって言われちゃったわ」

太股をさすっているダニーがコールを見上げ、目で何かを訴えた。

「あ、あのさ。そのアダンの事なんだけど」

言いづらそうに、コールが口をひらく。

「私、友達ならアダンと上手くやっていけるような気がするの。同じ痛みをもっているから、よけいかしら」

やっとアダンにむけていた不安がなくなり、ウィルはご機嫌だったため、コールの話など聞く耳をもとうとしなかった。

二人は顔を見合わせる。

「さっ、パーティーが終わってしまいうまえに戻るわよ。ダニー、いつまで床に座り込んでいるつもり」

ウィルはダニーの腕を引っ張りたたせた。

「人の話を聞けって」
とダニー。

「どうせ、くだらない話でしょ。コールも行くわよ」

二人の腕に手を回し、ウィルは二人を引きずるように部屋から出た。

翌朝、パーティーで疲れ果てた村の者達や兵士達が大広間で寝転がっていた。

床はいくつもの食べ残しで散らかり、足の踏み場がないくらいだった。

一番に起きたのは、ウィルだった。

あのあと、パーティーに戻り、村の者達に酒をすすまれ、気分がよかったウィルは一気飲みをし、それからの記憶がまったくなかった。

隣りでは、ダニーとコールが丸まって寝ている。

ウィルはズキズキと痛む頭を押さえた。

「お酒くさぁーい」

二人を起こさないように、ウィルは静かにその場から離れた。

パパとアダンの姿が見当たらない。

ウィルは大広間から見えるロバート王の寝室を見上げ、肩をすくめ

た。

「まったく、パパったら。片付けをしてから、イチャイチャしてよね」

文句をいいつつ、ウィルは床に落ちているゴミを拾い始めた。

遠くのほうでも、誰かが掃除をしている姿があった。

ウィルはすぐにわかった。

「ラズラス、おはよう」

小さい声でウィルが遠くにいるラズラスに挨拶をした。

普通の人では聞こえないはずなのに、ラズラスはすぐく耳がよく、こちらに手を振ってくれた。

ゴミが詰まった袋を引きずり、ウィルは寝転がっている人を踏まないようラズラスの方へと歩いた。

ラズラスのまわりはほとんど片付いており、綺麗にワックスまでかかっている。

その隣りで、イビキをかいている兵士達が寝ていた。

「起こせばいいのに」

やつのことでラズラスの所にたどりつき、ウィルは兵士を見て言った。

「結婚式の準備で疲れいるのよ。もう少し寝かせてあげようかとおもって」

額にかいた汗を腕で拭い、ラズラスはフーと一息ついた。

「もう大丈夫なの？」

紙袋を縛りながらラズラスがウィルに聞いた。

「大丈夫よ。なんとかやっていけそうだし」

「そう。よかった」

笑いもせず、ラズラスは下をむいたまま返事をかえした。

「それにしてもウィル。あなたお酒臭いわよ」とラズラス。

「やっ、やっぱり？」

急いでウィルは両手で口を押さえた。

ラズラスがクスツと笑う。

やっとのことで大広間が綺麗になった。

ゴミは呪文であとかたもなく消し去り、村の者達と兵士達を手分けして起こした。

皆大あくびで起き上がり、パーティーの話で盛り上がりながら村へと戻っていった。

兵士達もラズラスの指示で、朝のトレーニングへと出かけて行った。

「さあー、私達は攻撃呪文の練習にでも行きましようか。ウィル、用意をしてきなさい。私は先に森へと行ってまってるから」

「はあーい」

ウィルは自分の部屋へと戻り、ベットの横においてある杖を背中にしばった。

「最近、俺の事忘れてないか？」

用意をしているウィルに、箒がつまらなそうに言ってきた。

「ごめん、ごめん。今日は天気もいいし、使わせてもらおうわ」

部屋の窓を開け、ウィルは箒をつかむとまたがった。全速力で箒にまたがったまま、窓へと走る。

「おい、ウィル！まてって！！」

箒の焦った声など、もう遅かった。

ウィルは窓に向かってジャンプし、下へ下へと急降下して行く。冷たい風が頬を打ち付け、ウィルの顔はまるでスライムのようにプルプルと形をかえながら震えている。

「ウィル、冗談はもうやめようぜ」

箒は一向に飛ばず、落ちているだけだった。

「じよ、冗談じゃないのよ。久しぶりすぎて、飛び方を忘れちゃったの」

寒さで歯をカチカチ言わせながら、ウィルも焦っていた。

「俺の先を上を持ち上げろ。上にだぞ。後は俺がなんとかするから」
ウィルは箒に言われたとおりに、先を勢いよく上へと持ち上げた。

風圧で体が風にもっていかれそうになる。

ギュッと箒の先を握り、ウィルは体を低くし、なんとか箒にへばりついていた。

徐々に、箒のスピードが落ち、ゆっくりと浮かびはじめた。

体にあびる風が、緩やかになった。

「飛ぶのをさぼっているから、こうなるんだよ」

呆れ返った箒の声があった。

まだウィルは箒にへばりついたままだった。

「だって、窓から飛んでしまえばどうにかなるとおもったんだもん」

「ならない、ならない。箒は魔女の力で、浮かびあがるものなんだぞ。危なく粉々になる所だった」

「だって…色々忙しかったから」

「ふーん」

冷たく箒はあしらう。

「ごめんなさい」

ついにウィルはおれた。

「素直でよろしい。ほら、アルト銅像に近付いてきたぞ」

朝日がちょうどアルト銅像を照らしていた。

ウィルはようやく体を起こす。

空を飛んでアルト銅像を見たのは初めてだった。

「おはよう、ママ」

優しくウィルはアルト銅像に挨拶すると、急いでラズラスがまつ森へと向かった。

歩くと飛ぶとは大違いの速さで、あっというまに森へと到着した。

いつもの芝生の前で、ウィルはフラフラしながらも、なんとか地面へと着地した。

芝生に白いペンで呪文の輪が書かれている。

その中心でラズラスがウィルをまっていた。

「今日は新しい呪文を教えるわよ。魔力をかなり消費するから、あまり使われていない呪文だけど。知ってて、損はしないとおもうから」

「はい。よろしく願います」

最初に教わったのは、呪文の輪からだった。

簡単そうに見えて、案外難しい。

一ミリもずれず、綺麗な輪を描かなければ、呪文を唱えても効果がない、とラズラスは言う。

何度も何度も輪を書き直し、やっこのことでウィルは綺麗な輪を書くことができた。

「この魔法は決められた呪文はないの。ただ、自分がどれだけ強く想いをいれるかで、成功か失敗につながるわ」

そう言うと、ラズラスは死んだ青い鳥と、丸い小さな光りがはいったビンをもッケから取りだし、ウィルに渡した。

小さなビンにはいった光りは、とても元気そうにまわっている。

「これを、どうすればいいの？」

ビンを覗きこみながら、ラズラスに質問した。

「死んだ鳥を輪の中心において。光りがはいったビンを手で持って、祈ればいいの。魂よはいりこめって」

ウィルはラズラスの言われたとおりに、鳥を輪の中心に寝かせ、ビンを両手で包み混みしゃがみこんだ。

「あの中にはいれって言うの？」

どこからか、声が聞こえてきた。

そう、ビンのなかにはいつている光りの声だ。

とても嫌そうに、光りはビンの隅っこに移動した。

「そうよ。あなたの新しい体になるの」

小さい声でウィルは光りにといかけた。

「嫌よ。もつとましな体にしてちょうだい。鳥なんて、ただ飛んでるだけじゃないの」

「あら。そうでもないんじゃない？鳥は綺麗な声をもってるし、なんたってこの鳥は青い鳥よ。この国にいる青い鳥は、この一匹だけなのよ。皆の注目集めること、間違いなし！」

すると、光りの声が聞こえなくなった。

同時に、両手にもっていたビンが割れ、小さな光りが鳥へと近付いていく。

だが、これだけでは光りは鳥の体にはいることはできない。

ウィルは両目をとじ、懸命に自分の魔力を鳥へと集中させた。

体が熱くなり、力が抜けていく。

走ってもいないのに、息切れが止まらない。

パンツと何かがはじく音が聞こえた。

耳元で翼をこする、小さな音が聞こえる。

「案外、この体いいじゃないの」

光りの声だ。

目を開けると、さっきまで死んでいた青い鳥が、ウィルの肩にとまっていた。

ラズラスが後ろで拍手をしている。

「一発でできるとは、おもわなかったわ」

肩に止まった鳥が礼を言うかのように、ウィルの頬に擦り寄ると、空へと飛んでいってしまった。

ウィルは、地面に両手をつけ、必死に酸素を吸い込んだ。

「でも、それで限界って言ってたらまだまだね。もう一回したい所だけど、今日はこのへんにしましょう。お迎えも来ていることだし」

森の方へと目を向け、ラズラスが冷たい口調で言った。

長い杖をもち、林のほうでアダンがラズラスに向かってお辞儀をしていた。

隅っこにいた筈が、ウィルの体を支え持ち上げる。

ラズラスは杖を呪文の輪に向かってひとふりした。

地面に書かれた輪が、綺麗に消えた。

「続きは、また明日にしましょう。きおつけて帰りなさいね」

こちらに目も向けず、ラズラスは歩いて行ってしまった。

ちょうどアダンのいる場所へと差し掛かると、ラズラスは無言でお辞儀をし、その場を後にしようとした。

「ラズラスさん！」

アダンがラズラスを引き止めようと、名前を呼んだ。

しかし、ラズラスは無反応で振り向きもせず行ってしまった。

悲しげに、アダンがラズラスの背中をみているのを、ウィルは箒に支えながら見ていた。

「あいかわらず、ラズラス旦那はクールだな」と箒。

「なんだか、アダンがかわいそう」

「そうか？俺もあまり好きじゃなあぜ。あのブロンドヘアの女王様」

「どこが好きじゃないの？話した事もないくせに」

ムツとして、ウィルが反抗した。

「見た目に騙されるなってことだよ。ラズラス旦那がけげらいするなんて、相当の事だぜ。それに……」

「シャラップ」

ウィルは杖を箒にむけ、黙らせた。
うつむいたまま、アダンがこちらに歩いてきた。

もがいている箒を引きずり、ウィルはアダンの元へと駆け寄る。

「また失敗しちゃった。少しラズラスさんと話したかったんだけど。
まだまだ時間がかかるみたいね」

笑いながら、アダンはウィルに言った。

「ラズラスは難しい人だから」

これがウィルの、精一杯のフォローだった。

ラズラスが、アダンに心を開けない気持ちは十分にわかっていたからだ。

二人は城まで歩いて帰ることにした。
冷たい風が頬を打ち付け、ウィルの顔はまるでスライムのようにプルプルと形をかえながら震えている。

「ウィル、冗談はもうやめようぜ」
箒は一向に飛ばず、落ちているだけだった。

「じよ、冗談じゃないのよ。久しぶりすぎて、飛び方を忘れちゃったの」

寒さで歯をカチカチ言わせながら、ウィルも焦っていた。

「俺の先を上を持ち上げろ。上にだぞ。後は俺がなんとかするから」
ウィルは箒に言われたとおり、先を勢いよく上へと持ち上げた。

風圧で体が風にもっていかれそうになる。

ギュツと箒の先を握り、ウィルは体を低くし、なんとか箒にへばりついていた。

徐々に、箒のスピードが落ち、ゆっくりと浮かびはじめた。

体にあびる風が、緩やかになった。

「飛ぶのをさぼっているから、こうなるんだよ」

呆れ返った箒の声がした。

まだウィルは箒にへばりついたままだった。

「だって、窓から飛んでしまえばどうにかなるとおもったんだもん」

「ならない、ならない。箒は魔女の力で、浮かびあがるものなんだぞ。危なく粉々になる所だった」

「だって…色々忙しかったから」

「ふーん」

冷たく箒はあしらう。

「ごめんなさい」

ついにウィルはおれた。

「素直でよろしい。ほら、アルト銅像に近付いてきたぞ」

朝日がちょうどアルト銅像を照らしていた。

ウィルはようやく体を起こす。

空を飛んでアルト銅像を見たのは初めてだった。

「おはよう、ママ」

優しくウィルはアルト銅像に挨拶すると、急いでラズラスがまつ森へと向かった。

歩くと飛ぶとは大違いの速さで、あっというまに森へと到着した。

いつもの芝生の前で、ウィルはフラフラしながらも、なんとか地面へと着地した。

芝生に白いペンで呪文の輪が書かれている。

その中心でラズラスがウィルをまっていた。

「今日は新しい呪文を教えるわよ。魔力をかなり消費するから、あまり使われていない呪文だけど。知ってて、損はしないとおもうから」

「はい。よろしくお願いします」

最初に教わったのは、呪文の輪からだった。

簡単そうに見えて、案外難しい。

一ミリもずれず、綺麗な輪を描かなければ、呪文を唱えても効果がない、とラズラスは言う。

何度も何度も輪を書き直し、やっとのことでウィルは綺麗な輪を書くことができた。

「この魔法は決められた呪文はないの。ただ、自分がどれだけ強く想いをいれるかで、成功か失敗につながるわ」

そう言うと、ラズラスは死んだ青い鳥と、丸い小さな光りがはいったビンをポッケから取りだし、ウィルに渡した。

小さなビンにはいった光りは、とても元気そうにまわっている。

「これを、どうすればいいの？」

ビンを覗きこみながら、ラズラスに質問した。

「死んだ鳥を輪の中心において。光りがはいったビンを手で持って、祈ればいいの。魂よはいりこめって」

ウィルはラズラスの言われたとおりに、鳥を輪の中心に寝かせ、ビンを両手で包み混みしゃがみこんだ。

「あの中にはいれっていうの？」

どこからか、声が聞こえてきた。

そう、ビンのなかにはいつている光りの声だ。

とても嫌そうに、光りはビンの隅っこに移動した。

「そうよ。あなたの新しい体になるの」

小さい声でウィルは光りにといかけた。

「嫌よ。もっとましな体にしてちょうだい。鳥なんて、ただ飛んでるだけじゃないの」

「あら。そうでもないんじゃない？鳥は綺麗な声をもってるし、なんたってこの鳥は青い鳥よ。この国にいる青い鳥は、この一匹だけなのよ。皆の注目集めること、間違いなし！」

すると、光りの声が聞こえなくなった。

同時に、両手にもっていたビンが割れ、小さな光りが鳥へと近付いていく。

だが、これだけでは光りは鳥の体にはいることはできない。

ウィルは両目をとじ、懸命に自分の魔力を鳥へと集中させた。

体が熱くなり、力が抜けていく。

走ってもいないのに、息切れが止まらない。

パンツと何かのはじく音が聞こえた。

耳元で翼をこする、小さな音が聞こえる。

「案外、この体いいじゃないの」

光りの声だ。

目を開けると、さっきまで死んでいた青い鳥が、ウィルの肩にとまっていた。

ラズラスが後ろで拍手をしている。

「一発でできるとは、おもわなかったわ」

肩に止まった鳥が礼を言うかのように、ウィルの頬に擦り寄ると、空へと飛んでいってしまった。

ウィルは、地面に両手をつけ、必死に酸素を吸い込んだ。

「でも、それで限界って言ってたらまだまだね。もう一回したい所だけど、今日はこのへんにしましょう。お迎えも来ていることだし」

森の方へと目を向け、ラズラスが冷たい口調で言った。

長い杖をもち、林のほうでアダンがラズラスに向かってお辞儀をしていた。

隅っこにいた箒が、ウィルの体を支え持ち上げる。

ラズラスは杖を呪文の輪に向かってひとふりした。

地面に書かれた輪が、綺麗に消えた。

「続きは、また明日にしましょう。きおつけて帰りなさいね」

こちらに目も向けず、ラズラスは歩いて行ってしまった。

ちょうどアダンのいる場所へと差し掛かると、ラズラスは無言でお辞儀をし、その場を後にしようとした。

「ラズラスさん！」

アダンがラズラスを引き止めようと、名前を呼んだ。
しかし、ラズラスは無反応で振り向きもせず行ってしまった。

悲しげに、アダンがラズラスの背中をみているのを、ウィルは箒に支えながら見ていた。

「あいかわらず、ラズラス旦那はクールだな」と箒。

「なんだか、アダンがかわいそう」

「そうか？俺もあまり好きじゃなあぜ。あのブロンドヘアの女王様」

「どこが好きじゃないの？話した事もないくせに」

ムツとして、ウィルが反抗した。

「見た目に騙されるなってことだよ。ラズラス旦那がけげらいするなんて、相当の事だぜ。それに……」

「シャラップ」

ウィルは杖を箒にむけ、黙らせた。

うつむいたまま、アダンがこちらに歩いてきた。

もがいている箒を引きずり、ウィルはアダンの元へと駆け寄る。

「また失敗しちゃった。少しラズラスさんと話したかったんだけど。まだまだ時間がかかるみたいね」

笑いながら、アダンはウィルに言った。

「ラズラスは難しい人だから」

これがウィルの、精一杯のフォローだった。

ラズラスが、アダンに心を開けない気持ちは十分にわかっていたからだ。

二人は城まで歩いて帰ることにした。

冷たい風が頬を打ち付け、ウィルの顔はまるでスライムのようにプルプルと形をかえながら震えている。

「ウィル、冗談はもうやめようぜ」

箒は一向に飛ばず、落ちているだけだった。

「じよ、冗談じゃないのよ。久しぶりすぎて、飛び方を忘れちゃったの」

寒さで歯をカチカチ言わせながら、ウィルも焦っていた。

「俺の先を上を持ち上げろ。上にだぞ。後は俺がなんとかするから」

ウィルは箒に言われたとおりに、先を勢いよく上へと持ち上げた。

風圧で体が風にもっていかれそうになる。

ギュッと箒の先を握り、ウィルは体を低くし、なんとか箒にへばりついていた。

徐々に、箒のスピードが落ち、ゆっくりと浮かびはじめた。

体にあびる風が、緩やかになった。

「飛ぶのをさぼっているから、こうなるんだよ」

呆れ返った箒の声がした。

まだウィルは箒にへばりついたままだった。

「だって、窓から飛んでしまえばどうにかなるとおもったんだもん」

「ならない、ならない。箒は魔女の力で、浮かびあがるものなんだぞ。危なく粉々になる所だった」

「だって…色々忙しかったから」

「ふーん」

冷たく箒はあしらう。

「ごめんなさい」

ついにウィルはおれた。

「素直でよろしい。ほら、アルト銅像に近付いてきたぞ」

朝日がちょうどアルト銅像を照らしていた。

ウィルはようやく体を起こす。

空を飛んでアルト銅像を見たのは初めてだった。

「おはよう、ママ」

優しくウィルはアルト銅像に挨拶すると、急いでラズラスがまつ森へと向かった。

歩くと飛ぶとは大違いの速さで、あっというまに森へと到着した。

いつもの芝生の前で、ウィルはフラフラしながらも、なんとか地面へと着地した。

芝生に白いペンで呪文の輪が書かれている。

その中心でラズラスがウィルをまっていた。

「今日は新しい呪文を教えるわよ。魔力をかなり消費するから、あまり使われていない呪文だけど。知ってて、損はしないとおもうから」

「はい。よろしく願います」

最初に教わったのは、呪文の輪からだった。

簡単そうに見えて、案外難しい。

一ミリもずれず、綺麗な輪を描かなければ、呪文を唱えても効果がない、とラズラスは言う。

何度も何度も輪を書き直し、やっとのことでウィルは綺麗な輪を書くことができた。

「この魔法は決められた呪文はないの。ただ、自分がどれだけ強く想いをいれるかで、成功か失敗につながるわ」

そう言うと、ラズラスは死んだ青い鳥と、丸い小さな光りがはいったビンをポッケから取りだし、ウィルに渡した。

小さなビンにはいった光りは、とても元気そうにまわっている。

「これを、どうすればいいの？」

ビンを覗きこみながら、ラズラスに質問した。

「死んだ鳥を輪の中心において。光りがはいったビンを手で持って、祈ればいいの。魂よはいりこめって」

ウィルはラズラスの言われたとおりに、鳥を輪の中心に寝かせ、ビンを両手で包み混みしゃがみこんだ。

「あの中にはいれっていうの？」

どこからか、声が聞こえてきた。

そう、ビンのなかにはいつている光りの声だ。

とても嫌そうに、光りはビンの隅っこに移動した。

「そうよ。あなたの新しい体になるの」

小さい声でウィルは光りにといかけた。

「嫌よ。もつとましな体にしてちょうだい。鳥なんて、ただ飛んでるだけじゃないの」

「あら。そうでもないんじゃない？鳥は綺麗な声をもってるし、なんたってこの鳥は青い鳥よ。この国にいる青い鳥は、この一匹だけなのよ。皆の注目集めること、間違いなし！」

すると、光りの声が聞こえなくなった。

同時に、両手にもっていたビンが割れ、小さな光りが鳥へと近付いていく。

だが、これだけでは光りは鳥の体にはいることはできない。

ウィルは両目をとじ、懸命に自分の魔力を鳥へと集中させた。

体が熱くなり、力が抜けていく。

走ってもいないのに、息切れが止まらない。

パンツと何かがはじく音が聞こえた。

耳元で翼をこする、小さな音が聞こえる。

「案外、この体いいじゃないの」

光りの声だ。

目を開けると、さっきまで死んでいた青い鳥が、ウィルの肩にとまっていた。

ラズラスが後ろで拍手をしている。

「一発でできるとは、おもわなかったわ」

肩に止まった鳥が礼を言うかのように、ウィルの頬に擦り寄ると、空へと飛んでいってしまった。

ウィルは、地面に両手をつけ、必死に酸素を吸い込んだ。

「でも、それで限界って言ってたらまだまだね。もう一回したい所だけど、今日はこのへんにしましょう。お迎えも来ていることだし」

森の方へと目を向け、ラズラスが冷たい口調で言った。

長い杖をもち、林のほうでアダンがラズラスに向かってお辞儀をしていた。

隅っこにいた筭が、ウィルの体を支え持ち上げる。

ラズラスは杖を呪文の輪に向かってひとふりした。

地面に書かれた輪が、綺麗に消えた。

「続きは、また明日にしましょう。きおつけて帰りなさいね」

こちらに目も向けず、ラズラスは歩いて行ってしまった。

ちょうどアダンのいる場所へと差し掛かると、ラズラスは無言でお辞儀をし、その場を後にしようとした。

「ラズラスさん！」

アダンがラズラスを引き止めようと、名前を呼んだ。
しかし、ラズラスは無反応で振り向きもせず行ってしまった。

悲しげに、アダンがラズラスの背中をみているのを、ウィルは箒に支えながら見ていた。

「あいかわらず、ラズラス旦那はクールだな」と箒。

「なんだか、アダンがかわいそう」

「そうか？俺もあまり好きじゃなあぜ。あのブロンドヘアの女王様」

「どこが好きじゃないの？話した事もないくせに」

ムツとして、ウィルが反抗した。

「見た目に騙されるなってことだよ。ラズラス旦那がけげらいするなんて、相当の事だぜ。それに……」

「シャラップ」

ウィルは杖を箒にむけ、黙らせた。
うつむいたまま、アダンがこちらに歩いてきた。

もがいている箒を引きずり、ウィルはアダンの元へと駆け寄る。

「また失敗しちゃった。少しラズラスさんと話したかったんだけど。まだまだ時間がかかるみたいね」

笑いながら、アダンはウィルに言った。

「ラズラスは難しい人だから」

これがウィルの、精一杯のフォローだった。

ラズラスが、アダンに心わ開けない気持ちは十分にわかっていたからだ。

二人は城まで歩いて帰ることにした。

冷たい風が頬を打ち付け、ウィルの顔はまるでスライムのようにプルプルと形をかえながら震えている。

「ウィル、冗談はもうやめようぜ」

箒は一向に飛ばず、落ちているだけだった。

「じよ、冗談じゃないのよ。久しぶりすぎて、飛び方を忘れちゃったの」

寒さで歯をカチカチ言わせながら、ウィルも焦っていた。

「俺の先を上を持ち上げろ。上にだぞ。後は俺がなんとかするから」

ウィルは箒に言われたとおりに、先を勢いよく上へと持ち上げた。

風圧で体が風にもっていかれそうになる。

ギョツと箒の先を握り、ウィルは体を低くし、なんとか箒にへばりついていった。

徐々に、箒のスピードが落ち、ゆっくりと浮かびはじめた。

体にあびる風が、緩やかになった。

「飛ぶのをさぼっているから、こうなるんだよ」

呆れ返った箒の声でした。

まだウィルは箒にへばりついたままだった。

「だって、窓から飛んでしまえばどうにかなるとおもったんだもん」

「ならない、ならない。箒は魔女の力で、浮かびあがるものなんだぞ。危なく粉々になる所だった」

「だって…色々忙しかったから」

「ふーん」

冷たく箒はあしらう。

「ごめんなさい」

ついにウィルはおれた。

「素直でよろしい。ほら、アルト銅像に近付いてきたぞ」

朝日がちょうどアルト銅像を照らしていた。

ウィルはようやく体を起こす。

空を飛んでアルト銅像を見たのは初めてだった。

「おはよう、ママ」

優しくウィルはアルト銅像に挨拶すると、急いでラズラスがまつ森へと向かった。

歩くと飛ぶとは大違いの速さで、あっというまに森へと到着した。

いつもの芝生の前で、ウィルはフラフラしながらも、なんとか地面へと着地した。

芝生に白いペンで呪文の輪が書かれている。

その中心でラズラスがウィルをまっていた。

「今日は新しい呪文を教えるわよ。魔力をかなり消費するから、あまり使われていない呪文だけど。知ってて、損はしないとおもうから」

「はい。よろしく願います」

最初に教わったのは、呪文の輪からだった。

簡単そうに見えて、案外難しい。

一ミリもずれず、綺麗な輪を描かなければ、呪文を唱えても効果がない、とラズラスは言う。

何度も何度も輪を書き直し、やっとのことでウィルは綺麗な輪を書くことができた。

「この魔法は決められた呪文はないの。ただ、自分がどれだけ強く想いをいれるかで、成功か失敗につながるわ」

そう言うと、ラズラスは死んだ青い鳥と、丸い小さな光りがはいったビンをもっとから取りだし、ウィルに渡した。

小さなビンにはいった光りは、とても元気そうにまわっている。

「これを、どうすればいいの？」

ビンを覗きこみながら、ラズラスに質問した。

「死んだ鳥を輪の中心において。光りがはいったビンを手で持って、祈ればいいの。魂よはいりこめって」

ウィルはラズラスの言われたとおりに、鳥を輪の中心に寝かせ、ビンを両手で包み混みしやがみこんだ。

「あの中にはいれっていうの？」

どこからか、声が聞こえてきた。

そう、ビンのなかにはいつている光りの声だ。

とても嫌そうに、光りはビンの隅っこに移動した。

「そうよ。あなたの新しい体になるの」

小さい声でウィルは光りにといかけた。

「嫌よ。もっとましな体にしてちょうだい。鳥なんて、ただ飛んでるだけじゃないの」

「あら。そうでもないんじゃない？鳥は綺麗な声をもってるし、なんたってこの鳥は青い鳥よ。この国にいる青い鳥は、この一匹だけなのよ。皆の注目集めること、間違いなし！」

すると、光りの声が聞こえなくなった。

同時に、両手にもっていたビンが割れ、小さな光りが鳥へと近付いていく。

だが、これだけでは光りは鳥の体にはいることはできない。

ウィルは両目をとじ、懸命に自分の魔力を鳥へと集中させた。

体が熱くなり、力が抜けていく。

走ってもいないのに、息切れが止まらない。

パンツと何かがはじく音が聞こえた。

耳元で翼をこする、小さな音が聞こえる。

「案外、この体いいじゃないの」

光りの声だ。

目を開けると、さっきまで死んでいた青い鳥が、ウィルの肩にとまっていた。

ラズラスが後ろで拍手をしている。

「一発でできるとは、おもわなかったわ」

肩に止まった鳥が礼を言うかのように、ウィルの頬に擦り寄ると、空へと飛んでいってしまった。

ウィルは、地面に両手をつけ、必死に酸素を吸い込んだ。

「でも、それで限界って言ってたらまだまだね。もう一回したい所だけど、今日はこのへんにしましょう。お迎えも来ていることだし」

森の方へと目を向け、ラズラスが冷たい口調で言った。

長い杖をもち、林のほうでアダンがラズラスに向かってお辞儀をしていた。

隅っこにいた箒が、ウィルの体を支え持ち上げる。

ラズラスは杖を呪文の輪に向かってひとふりした。

地面に書かれた輪が、綺麗に消えた。

「続きは、また明日にしましょう。きおつけて帰りなさいね」

こちらに目も向けず、ラズラスは歩いて行ってしまった。

ちょうどアダンのいる場所へと差し掛かると、ラズラスは無言でお辞儀をし、その場を後にしようとした。

「ラズラスさん！」

アダンがラズラスを引き止めようと、名前を呼んだ。

しかし、ラズラスは無反応で振り向きもせず行ってしまった。

悲しげに、アダンがラズラスの背中をみているのを、ウィルは箒に支えながら見ていた。

「あいかわらず、ラズラス旦那はクールだな」と箒。

「なんだか、アダンがかわいそう」

「そうか？俺もあまり好きじゃなあぜ。あのブロンドヘアの女王様」

「どこが好きじゃないの？話した事もないくせに」

ムツとして、ウィルが反抗した。

「見た目に騙されるなってことだよ。ラズラス旦那がけげらいするなんて、相当の事だぜ。それに……」

「シャラップ」

ウィルは杖を箒にむけ、黙らせた。

うつむいたまま、アダンがこちらに歩いてきた。

もがいている箒を引きずり、ウィルはアダンの元へと駆け寄る。

「また失敗しちゃった。少しラズラスさんと話したかったんだけど。まだまだ時間がかかるみたいね」

笑いながら、アダンはウィルに言った。

「ラズラスは難しい人だから」

これがウィルの、精一杯のフォローだった。

ラズラスが、アダンに心わ開けない気持ちには十分にわかっていたからだ。

二人は城まで歩いて帰ることにした。

第4章アルトの過去前半2

薄暗く、コケがたくさん生えた石段のなかをウィルは歩いていた。

そう、またあの夢だ。

こう何回も見ると、怖い気持ちなんて薄れてゆく。

ウィルは何度も見た夢のとおりに道を進んでいた。

そのとき、激しく体が揺れた。

ウィルは驚いて目が覚め、ベットの横においてある杖をすかさず手に取った。

まだ地面が揺れている。

「地震？」

しだいに揺れはおさまり、部屋の小物がコトコトと左右に揺れバランスをとっていた。

「地震なんて珍しいわね」

椅子にかけてあったガウンをはおり、ウィルはベットからおりた。

箒は地震にもきづかず、ぐっすりと眠っている。

「のんきなものね」

呆れながら、箒にむかって言った。

すると、廊下の方で誰かが明りを灯しているのか、ドアの方からかすかに光りがもれていた。

こんな時間にいったい誰かしら。

持っていた杖をベットの横に戻し、肩に垂れ下がったガウンを上を持ち上げながら、ウィルはドアの方へと近付いた。

「いたか？」

「いえ。どこを探してもみあたりません」

「いったいどこにいかれたというのだ。王様に知られたら大変なことになるぞ。朝になるまえに、なんとか探しださねば」

兵士の声だ。それも、数十人の気配。

どうやら、とても焦っているようだった。

ドアを開けると、困り果てた兵士達が驚いてこちらを振り向いた。

ウィルは、なんとなく後ずさってしまった。

「どうかしたの？」
とウィル。

「いえ。何事もございませんよ……何事」

一人の兵士が首を横に振って言った。

どうみても怪しい。

ウィルは一人一人の兵士に、疑いの目を向ける。

そして、一人だけ嘘のつけない兵士が口をひらいた。

「さっきから、アダン様の姿がみあたらないのです」

後の兵士達が、ギロツと口をひらいた兵士を睨み付けた。

「パパの寝室で一緒に寝てるんじゃないの？」

「それがですね」

兵士達の声がそろった。

「私がみまわりをしていたときに、アダン様が一人でどこかに歩いて行くのが見えたんです。お声をかけても無反応で。後をつけようとをもって、角をまがるといなくなってしまったんです」

さきほど素直に言ってきた兵士が、そう答えた。

「もう部屋に戻ってるんじゃない？そこまで心配する事じゃないわよ」

もっと、大事件かとおもったウィルは、拍子抜けだった。

「しかし、アダン様もまだこの城にこられてまもないですし。もしかしたら、城のなかで迷子になってるかもしれません」

数十人の兵士達が、心配そうに顔を見合わせ頷きあう。

よっぽど兵士達にも、気に入られているのね。

「しかたないわね。私も手伝うわ」とウィル。

いっせいに兵士達が首を横にふった。

まるで、人形のように何回も。

「いけませ。姫様にそのような事をしてもらうわけには」

面白いほどに、兵士達の声がそろっている。

「私が探したほうがはやいわよ。ようするに、アダンの魔力を感じとればいいのよ」

「そのようなことができるのですか？」

兵士達が驚いて声をあげる。

得意げにウィルは頷いた。

「おおー」と兵士達。

何個か持っているローソクを兵士から貰い、ウィルは魔力に集中した。

さあーアダン。いったい、どこにいつちゃったの。

かすかに、アダンの魔力が感じてきた。

たぶん、ここから大分離れた場所にいるに違いない。

「あっちからよ。行きましょう」

兵士達を後ろに連れ、ウィルはアダンの魔力がする方へと歩き出した。

階段を上ったりおりたり。蜘蛛の巣がはって、あまり使われていない階段を通ったり。

よくアダンは通れたものね。

髪の毛についた蜘蛛の巣をとりながら、ウィルはおもった。

迷路のようなみちのりを歩いていくと、いつのまにか見覚えのない階段へとたどりついた。

壁には、アルトの小さい頃の絵や、親と一緒にいる絵など、さまざまな絵が飾られている。

「貴方達、ここにはいったことはある？」

ウィルは、後ろにいる兵士達に聞いた。

だが、誰も来たことがないのか、兵士達全員、首を横に振った。

階段にはほこりがたまり、そこには足跡が上へとつづいていた。

髪の毛を引きずった後もある。

きつとアダンね。

ウィルと兵士達は長い階段を懸命にのぼった。

ようやく上につくと、目の前にドアが一つ立っていた。

ドアの中から、アダンの魔力の気配がする。

ドアに近付き、ウィルがドアノブに振れた瞬間、とてつもなく強い魔力を感じた。

アダンの他に誰がいる……。。

ウィルはドアノブから手を離し、後ろにいる兵士から杖を取り上げ壁にへばりついた。

「ど、どうしたんですか？」

杖をとられた兵士が、あっけにとられている。

「静かに。アダンの他に誰がいるわ。それも強い魔力よ。この魔力は……」

ウィルの頭に、幼い頃の記憶が蘇ってきた。

そう、この魔力はママを殺したドラゴンの気配。

もしかしたら、アダンは……。

杖を握る手に力がある。

深呼吸をし、ウィルは決意を決めたのか、ドアをおもいきり蹴飛ばした。

バンツとドアが開き、ほこりっぽい空気が漂ってきた。

ウィルは部屋にはいり杖を構え、辺りを見渡す。

続けて兵士達が杖をもち、部屋のなかにはいる。

だが、そこにはドラゴンの姿などなかった。

あるといえば、床でぐっすりと寝ているアダンの姿だけ。

でも、ドラゴンの気配は消えてはいない。

部屋中、強い魔力でビリビリしている。

兵士達が、寝転がっているアダンの体を揺さぶって起こしていた。

「何事なの？」

目を覚ましたアダンが、寝ぼけながら起き上がった。

一安心した兵士達は、ぐったりと床に座り込んでしまった。

すると、さっきまで感じていたドラゴンの気配が、フッと消えてしまった。

ウィルは杖の力を緩めた。

どうして？ さっきまで、あの気配でいっぱいだったのに。

「ウィル、どうして貴方もこんな所にいるの？」

不思議そうにアダンが聞いてきた。

「こっちが聞きたいわよ。アダンこそ、どうしてこんな所で寝ていたの？」

ほこりまみれになったアダンのパジャマを、ウィルははらってあげた。

「トイレに行こうとしたの。でも道に迷っちゃって。で、この部屋にたどりついて……眠くなって。そんな感じ」

床についたブロンドの髪をかきながら、アダンが笑って答えた。

ウィルと兵士達は、溜め息をついた。

「とりあえず寝室に戻りましょう。ちゃんとベットで寝ないと風邪をひきますよ」

兵士は自分のマントをとり、アダンにかけてあげた。

兵士達とアダンは、部屋を出て行こうとしたが、ウィルだけは何かがひっかかってまらなかった。

「ウィル様」

こちらにこないウィルに、兵士が呼び掛ける。

「今行く」

床に落ちているアダンの杖を拾うと、ウィルも部屋から出て行った。

アダンを寝室へとおくり、ウィルは落ちていた杖をかえすと、自分も部屋ともどることに。

「気のせいだったのかしら」

ベットのなかにはいりなが、ウィルは独り言を呟いた。

すると、隣りにおいていた杖が、なにやら青く輝いている。

その光景を見て、ウィルは毛布をかけようかという構えにはいりながら固まってしまった。

前からは、杖はこんなに輝いていたっけ？

いいえ。杖がこんなに輝いた事はないわ。えっ……何が起こったっていうの。

頭のなかは、パニック状態だった。

ウィルはベットの横で眠っている筈に手をのびし、つついた。

「くすぐったいなあ。やめてよおー」

夢のなかの箒は、聞いたこともないような甘え口調になっていた。

それでもウィルは、箒をつつく。

ついには、バランスを崩し箒は床にたたき付けられてしまった。

「いったあー。いや、本当にいたい」

箒が体を揺すりながら、やつのことで起きてくれた。

ウィルに激怒しようと、箒がベットにあがろうとしたが、それよりも先に輝いている杖に目がいったらしい。

箒はじつと立ったまま、無言だ。

「どうおもう？」

ウィルが先に口をひらいた。

「杖も俺みたいに生きているからな。なんか、ご不満があって輝いてるんじゃないのか？」

「不満って？」

「さあー」

と箒は体をくねらせる。

青い輝きを放った杖が、一人でにフワッと浮くと、二人の目の前を通過した。

杖はドアの前で止まり、じつとこちらを見ているような気がした。

ふと、おもいついたかのよいに箒がしゃべった。

「俺とでも話せるんだから、杖とも話せるんじゃないのか？」

「無理なこと言わないでよ。ここ何十年、この杖と共にいるけど、言葉をはったことなんて一度もないんだから」

「もしかしたら、無口かもしれないぜ」

「貴方がおしゃべりすぎなの」

そうこうしているうちに、杖はみずからドアを押し開け廊下へと出て行ってしまった。

「追わないのか？」

冷静に箒が聞く。

「追うに決まってるでしょ」

ウィルは箒の先をつかみ、杖の後を追った。

呪文を唱えていないのに、杖からは魔力はっしている。

器用に階段をのぼり、ついてきている二人の歩調を合わせるように、一回止まっては歩きを繰り返していた。

身軽な杖は、階段の最上階にのぼるなり、クルッと向きを変え、疲れているウィルを見下ろしながら、トントンとステップをふんदै

た。

「余裕じゃないの。杖さん」

言葉が通じているのかわからないが、ウィルはなんとなく杖が余裕をかましているかのように見えたので、ついつい話しかけてしまった。

無論、杖が言葉をかえしてくれるはずもない。

やっとのことで上についた。

ウィルはフーと一息ついた。

そうついた場所とは、さきほど兵士達と一緒にきた場所だった。

杖はウィルの回りを一周し、

「おいで」

と言うかのように、ドアのなかへとはいっていった。

「におうな」

渋い声で箒が言った。

「行くわよ」

ウィルはドアの前で突っ立っている箒を後ろから押しながら、部屋のなかにはいった。

あいかわらず、部屋のなかはほこりまみれで、光りは青く光ってい

る杖の灯りだけだった。

杖の光りが、ますます強くなる。

ついには、真っ暗だった部屋のなかを、すべて照らし出すまで光り輝き出した。

あまりの眩しさに、ウィルは目がくらんだ。

青い光が、しだいに白い色へと姿をかえてゆく。

ウィルは、ゆっくりと目を開けた。

ただ何もない部屋だとおもっていたが、天井や壁には、たくさんの絵が飾られていた。

まるで、倉庫のようだ。

箒も、辺りを見渡し、天井を眺めている。

どれもこれもすべつ、アルトの絵だった。

とても幸せそうな顔をしている。

すると、杖の後ろにある壁に目があった。

あちこちに飾られてある絵よりも、遥かに大きな絵が飾られていたのだ。

ウィルは、壁のほうへと歩み寄って行く。

銀のがくぶちで飾られた絵は、どうも家族全員の絵が書かれているようだ。

「えっ！」

おもわず、ウィルは声をあげた。

ウロウロしていた箒が、ウィルの声を聞きすっとんできた。

そう、家族の絵には、まったく同じ顔がふたつあったのだ。

「アルト女王様が二人……」
と箒。

呆然と二人は絵に見入っていた。

「そろそろ、本題にはいりましょうか」

部屋中に、男の声が響き渡った。

驚いた箒がウィルの後ろに隠れる。

ウィルも、絵から目を離し声の主を探した。

「驚くことはないでしょう。さきほど箒さんも言ってたじゃないですか。杖も生きているんですよ」

そう、声の主はあきらかに杖だった。

ウィルは喉につっかかった唾を飲み込んだ。

「だ、だって。さっきまで何も、しゃべらなかったじゃない」

「これは失礼」

硬いはずの杖がクニャツと前に折れ、お辞儀のポーズをした。

さすがの箒も、ここまではできないだろう。

「私は三百年前から、ここラスト国に使えているルーでございます。と言っても、誰も私を名前で呼ぶことはないのですがね」

ガッカリといわんばかりに、杖は溜め息をついた。

「三百年前、私も普通に皆様とおしゃべりをしていました。しかし、口が軽いために、女王様から強くお叱りをうけ、呪いの魔法をあびせられたのです」

「じゃあー、なぜ今は言葉が話せるの？」

「簡単なことですよ」

クルッ杖がまわった。

きつと、背を向けたにちがいない。

「女王様は、この日がくることを知っていました。そう三百年前から、ずっと。だから、私が話せるようになったのは、そのときが来たということですよ」

話がまったく読み込めないウィルと箒は、頭のなかで混乱していた。

「もったいつけるなって」

しびれをきらした箒が杖につっこむ。

杖がくすくすと笑った。

「これは失礼。三百年も前から生きていると、色々あるんですよ。たとえば、私の特技は記憶のなかへと送り込む事。過去へとね」

ドアがきちんと閉まっているはずなのに、どこからか暖かい風が足下をすりぬけていく。

「私は話好きですが、説明をするのは苦手なのですよ。だから、これから貴方達に女王様へ申し付けられていた過去へのご案内させていただきます」

「ちよっ、ちよっとまってよ」

暖かい風が強くなっていく。

足下に集まった風が杖の方へと集中的に流れ、大きな円を円を描き始めた。

杖がなにやら呪文を唱えている。

次の瞬間、風が渦巻きとかし、部屋全体へと風が飛び散っていった。

あまりの強い風にウィルは立っていられなくなり、床にしがみついた。

箒はというと、足も手もないため、そのまま爆風に巻き込まれ飛んでいってしまった。

しだいに風はやみ、ウィルは床にへばりついたまま顔をあげた。

さっきまでなかった真っ暗なマンホールの上を、杖が浮いている。

「さあー行きましょう。アルト女王様の過去へと」

ウィルと、壁にぶつかって倒れている箒の返事すら聞かずに、杖がまた呪文を唱えはじめた。

マンホールの中から、ゴォーと地鳴りのような音が聞こえてくる。

次はいったいなんなのよ。

すると、少しづつウィルの体がマンホールへと引っ張られていく。

だが、こんなにも優しく扱われるのは今だけだった。

尻が浮かびあがり、ウィルは石ころのように転がりながらマンホールへと引き寄せられていった。

目が回って気持ち悪い。

「キャアー」

女の叫び声をあげながら、箒が先にマンホールのなかへと飲み込まれていった。

「吐きそう」

あまりの気持ち悪さに、ウィルはフツと意識が遠のいてしまった。

第4章アルトの過去後半（前書き）

長いです（TOT）どうぞ、最後までつきあってください☆

第4章アルトの過去後半

春のような心地よい風と、花と草の匂い。

顔に何かが振れている。

目が覚めると、目の前には緑豊かな草があり、秋だというのに色とりどりの花が咲いていた。

ウィルは重たい体を起こした。

「ここは……」

見に覚えのある場所。

それもそのはず。

ここは、どう見てもラスト国。

ラズラスといつも攻撃呪文の練習場所として使っている森だった。

すると、どこからともなく子供達の笑い声が聞こえて来た。

ふと、ウィルは空を見上げる。

箒にまたがった子供達が、笑い声をあげながら、何かから逃げた。

ウィルは鳥肌がたった。

そう、子供達を追いかけていたのは、数匹のドラゴン達だったのだ。

すかさず背中にまいてあった杖を取りだし、ウィルはドラゴンめがけて呪文を唱えた。

が、杖から魔法がでてこない。

「大丈夫ですよ」

杖のルーが、そっとウィルに呼び掛けた。

「どこが大丈夫なのよ！子供達がドラゴンに襲われているのよ！！」

「襲われているわけではありません。あれは、ドラゴン達と遊んでいるのですよ」

遊んでる？

ウィルは耳を疑った。

しかし、そう言われてみれば、子供達とドラゴンが楽しそうにじゃれあっているように見えてきた。

呆然とウィルはその光景に見入っている。

「信じられないのは、しょうがないことだよ。ウィル」

どこまで飛ばされたのか、木の枝が体に絡み付いている筈が姿をあらわした。

「どうということなの？」

眉間にしわを寄せ、ウィルは信じられない光景に戸惑っていた。

「昔、ドラゴンと魔法使いはとも仲がよかったんだ。アルト女王様も、小さい頃ドラゴン達と一緒に遊んでいたんだよ。ラズラス旦那もな」

「嘘よ！だってドラゴンは凶暴で、皆を苦しめる生き物なんでしょ？ ママだって、ドラゴンに殺されて」

わけがわからなくなったウィルは、頭をかきむしった。

箒は自分の体をそりかえし、上を見る。

「ウィル、あいつらから邪気は感じられるか？」

かきむしっていた手が止まる。

戦争の時のドラゴンと、今日の前で子供達とたわむれているドラゴン。

言われてみれば、今のドラゴンからは嫌な空気など漂っていない。

反対に、とても穏やかな空気がドラゴン達の体を包んでいるようにも見える。

「これが、ドラゴンの本当の姿なの？」

ウィルの質問に、静かに箒は頷く。「そろそろ、本題にはいつでもよろしいですか？」

ずっと手に握られていたルーが、場の空気をかえるように口をひらいた。

ルーはウィルの手から離れると、フワッと体を浮かばせた。

「今の過去は、およそアルト女王様が生まれて五年。つまりアルト女王様が五歳のときの過去に來ています。時空が歪みやすくなっておりますので、過去が所々とんでしまいますがご了承くださいませ」バスガイドみたいな口調で、ルーが説明していく。

「あともう一つ。過去と言っても、その人達に話しかけることは可能です。しかし、少しでも話しかけてしまうと未来が大きく変わる恐れがありますので、きおつけてください。おっと、人物に触れる事はできませんよ」

「こんな所に私達をつれてきて、何があるって言うの？」とウィル。

「この過去をみれば、すべてがあてはまると思います。今までの出来事に」

あえて詳しく言わず、もったいつけながらルーが言う。

強引にでも、すべてはかせようとウィルがルーに近付こうとしたとき、どこからか美しい歌声が聞こえてきた。

それも、どこかで聞いた事がある……この歌は。

箒とウィルは辺りを見渡す。

「來ましたね。さて、ここからは口にチャックをお願いします」

冷静にルーはそう言うと、黙り込んでしまった。

歌声に体が引き寄せられる。

どこからか聞こえているのかまったくわからないのに、体はまっすぐと前へ歩いて行く。

芝生の真ん中に、大きな大木が見えてきた。

そこに、大木に絡み付いて、歌声に聞き惚れている一体の大きなドラゴンがいた。

もう一人、大木に寄り掛かって楽器を弾いている一人の少女もいる。

木でできた琴のようなものを弾きながら、真っ黒いローブに身を包み少女は気持ちよさそうに、優しい歌声を空に響かせていた。

—ママ—

歌を歌っている少女の横顔。

まぎれもなくアルトだった。

ウィルが、もっと近くに行こうとしたが、ルーが服をつかんで引き止める。

文句を言おうとウィルは言葉をはっしようとしたが、喋ってはいけないと言われたのを思い出し、しかたがなく諦めた。

うっとりとしていたドラゴンが、何かの足音でピクツと体を動かし、ジッと向こう側に目を向けた。

大木がキシキシときしむ。

少女の歌声も止む。

「アルト、ここにいたのね」

小さい頃のラズラスだった。

とても幼いラズラスは、ウィルよりも身長が低く、とても可愛らしかった。

今のラズラスからは、とても想像しにくい子供バージョンのラズラス。

ウィルは、おかしくてたまらなかった。

声をたてず、くすくすとウィルら笑う。

「やあーラズラス、一段とたくましくなったな」

ドラゴンが翼を広げ、大木からおりてきた。

「嬉しい限りの言葉だわ。ベギス」

ベギスと呼ばれたドラゴンは、ニツコリと口元を緩めた。

「ラズラスの後ろに隠れているちっこいのも、あいかわらずじゃな」

ラズラスの背中から、青い瞳がチラッと除いた。

琴を皮で包み、アルトは背中にしばった。

「アダード、ベギスに挨拶ぐらいしなさい」

溜め息をつき、アルトはラズラスの後ろにいるアダードに話しかけた。

モジモジと影が動き、やつのことで、その影はラズラスの後ろから現れた。

ブロンドの髪をのぞいては、すべてアルトにそっくりだった。

「さすが双子じゃな。髪の色まで一緒だったら、わしかて、どっちがどっちか区別がつかんわい」

甲高い声で笑いながら、ベギスはアダードの頭をなでて言った。

「おはようございます。ベギスさん」

アルトそっくりのアダードは、口のなかに言葉を詰まらせたような感じで挨拶をした。

「うむ、おはよう。さて、わしはそろそろ行くかの。アルト、また歌を聞かせてくれ」

「ええ」

アルトは微笑みをベギスにむける。

翼を大きく伸ばし、めいいっぱいはためかせると、ベギスは空高く飛んで行った。

三人はベギスの背に向かって手を振り、城へともどっていった。

―双子だったなんて―

考えをまとめる時間などなく、映像はすぐに切り替わり、城のなかへと移動した。

女王様と王様が、帰ってきた二人を抱き締めて何かを話しているようだ。

幸せそうに、アルトとアダードは手を繋ぎ、王様達と共に二階へとあがっていく。

絵に描いたような、幸せな家庭。

ウィルは、とても寂しい想いが込み上げてきた。

―ママが生きていたら、きっとあんなふうに：―

そのとき、時空の歪みのせいか、階段を登っている四人の姿がぼやけてきた。

映像はプツリッととだえ、辺りが真っ白な空間に囲まれてしまった。

箒がウィルの側にピタッとくっついてくる。

「なにが起こったんだ？」

「わからないわ。ルー！　いったいどうしたっていうの」

空間の向こうで浮いているルーに、ウィルは叫んだ。

落ち着いた様子で、ルーは先の見えない道を眺めていた。

無言のまま。

すると、どこからか話し声が聞こえてきた。

白い空間で響き渡る。

「もう、限界か。封じるしかないようだな」

「はやく手を打ったほうがいい。邪悪な魔力に心を奪われぬうちに」

「うむ。ベギス、お主の力を貸してほしい。わしの力ではどうすることも……」

「わかっておる。わしも手伝おう」

「すまない」

しだいに遠くの方から、二つの影が接近してきた。

暖炉のあかりが、白い空間をてらしだし、いつのまにか辺りは部屋へと変わっていた。

「明日、村の者達を城の前に集めておいてくれ。後は我々、スカイスネイクの者達がうけもつ」

「ああ。村の者達には悪いが、そうするしかないだろう」

そう言って、会話は途切れてしまった。王様とベギスは、時間が止まってしまったかのように動かなくなった。

「白魔導師と黒魔導師がいたことはご存じでしたか？」

ルーがきゆうにウィルにしゃべりかけてきた。

「一度だけ、ママから聞いた事があるわ。でも、あれはただの作り話でしょ？」

ウィルが答える。

「いいえ。白魔導師と黒魔導師は本当に存在していたのですよ。村の半分以上は白魔導師の血を受け付いています。けれど、残りの村の者達は、黒魔導師の血が流れていたのですよ」

「じゃー、あの時ママが話してくれたことは、すべて本当の事だったのね」

驚きながらウィルが言う。

「所々おひれはついていますかね。黒魔導師の力は、下手をすると、心を支配されとしまうのですよ。黒魔導師の力はとてつもなく強く、普通の村の者達ではいじすれことは難しいことなのです」

「だから、王様は決意したのです。力を封じ込めてしまおうと。案の定、村の者が一人犠牲にあってしまいました」

ルーが説明しているうちに、いつのまにか城の外へと映像が切り替わっていた。

門の前には、黒いローブを着た村の者達が並んでいる。

そこには、ベギスを中心に、数体のドラゴンが立ち並んでいた。

「一人づつ、順番にベギス王の前に立て」

赤いマントを着たドラゴンが、牙をむき出し手村の者達に指示している。

言われたとおり、村の者達は順番にベギスの所へと足を運んで行く。若い少年が、ビクビクしながらベギス王の前にしゃがみこみ、両手をあわせた。

体は震え、怖さで涙を流している。

ベギスは優しく少年の頭をなでてあげた。

「何も怖がる事はない。すぐに終わる。さあー目を閉じて」

「ベギス王」

小さな声で少年はベギスの名をよんだ。

「魔法の力を封じ込めたら、もう空を飛ぶことはできないの？」

涙をローブの袖でふきとりながら、少年はベギスに聞いた。

「大丈夫。ただ、強すぎる魔力を小さくするだけじゃ。何も心配することはない。空が飛べなくなることはありゃーせん」

ベギスは自分の胸に手を当て、呪文を唱えた。

赤く真ん丸い玉が、ベギスの胸から現れた。

宝石のような輝きを放った玉からは、背筋が凍るほどの強い魔力が感じられる。

その玉を少年の額にあて、ベギスはニツコリと少年に微笑むと、玉に力をこめた。

少年の額から、黒い影が姿をあらわす。

黒い影は、どこかに逃げようともがいていたが、あっけなく玉のなかへと吸い込まれてしまった。

「終わったよ」

ベギスはもう一度少年の頭をなでた。

「ありがとうございます」

さっきまで泣いていた少年は、封印が終わるなり、元氣よくベギスにお辞儀し、親のもとへとかけていった。

「次の者！来たれよ」

ベギスはたくさんの黒い影を玉のなかへと封印していく。

黒魔導師をもつ村の者達が半分以上いなくなった頃には、もう赤い玉は黒ずんでいた。

ベギスも相当疲れているようだ。

と、門の後ろに隠れて、ベギスの働きを除いている少女がいた。

「ママ？」

くべつがつかないウィルは、アルトかアダードがさっぱりわからなかった。

―次の映像に切り替わりますよ―

ルーの声が耳にはいつてきたころには、もう切り替わっていた。

次は真っ暗な部屋のなかだった。

ベットにもぐりこんで、誰かがすすり泣いている。

「こんなはずじゃなかったの…。どうして…。どうして私が」

声からして、アルトに違いないとウィルはおもった。

―どうして泣いているの？―

そう聞きたいのに。

ベットに手を伸ばそうとしたが、ウィルはすぐにその手を引っ込めた。

聞いてしまったら、未来が変わってしまう。

ウィルはアルトの泣き声を、じっと聞いているだけしかできなかった。

「王様、大変です！！村の者が一人殺されました！！これで二人目です」

泣いていたアルトの声はとだえ、兵士の叫び声が耳に響いてきた。

部屋にいたはずのウィルは、城の大広間にたっていた。

たくさんの兵士達が頭をさげ、王様が困ったように腕をくみ広間をウロウロしている。

「どういことだ。昨日、村の者達の魔力を封印したばかりなのだぞ！」

怒りながら、王様は自分の爪をかじった。

兵士達が頭をさげながら、隣同士の者達と騒ぎ始める。

「もしかしたら、まだ黒魔導師の力をもっている者がいるかもしれない」

一人の兵士が、王様につげた。

「誰だというのだ。城の兵士達も封印はしてもらった。村の者達も兵士に誘導されながら来たのだぞ。まだ、黒魔導師の力をもつものがどこにいるんだ！」

頭にのっかっている王冠、王様は床にたたき付けた。
兵士達はビクツと顔をあげ、全員王様を見る。

「父様」

階段の上から大広間を見下ろしているアルトが王様を呼んだ。

「どうしたんだ、アルト」

王様は怒りを隠そうと、苦笑いでアルトを見上げる。
どうも、アルトの様子がおかしい。
顔を真っ青にし、焦っている。

「父様……アダードが。アダードのようすがおかしいの！はやく来て！」

それをきき、王様は急いで階段へと向かった。

兵士達も顔を見合わせ、王様の後についていく。

ウィルと箒も、兵士達にまざりながら階段を駆け上がる。

部屋のドアは開けっ放しになっており、中からは泣き声が聞こえてくる。

中にはいると、ベットを取り囲んだ、女王様、王様、アルトが泣いているアダードをなだめていた。

毛布にくるまり、顔をだそうとしない。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

ずっと、アダードは同じ言葉を繰り返している。

王様が優しくアダードの体に触れる。

瞬間、王様はすぐさま手を引っ込めた。

「な、なんてことだ。まさか……アダードが」

ショックのあまり、王様は後ろに倒れこんでしまった。

「アダード、お顔を見せて！」

アルトはくるまっている毛布を勢いよく引っ張った。
毛布はすんなりはずれ、髪がぐしゃぐしゃになったアダードが体を丸めていた。

「私……私」

しゃっくりをあげ、アダードがやつのことで顔を見せた。

兵士達が、悲鳴をあげ腰についている杖を取りだし、アダードにむけた。

口のまわりには血が付き、顔半分が黒い痣でおおわれていたのだった。

「お姉ちゃん」

鼻水をたらし、アダードは涙で顔がぐしゃぐしゃになっていた。

アルトは一瞬アダードの姿にのけぞった。

だが、すぐにアダードを優しく抱きしめてあげた。

はかりしれない魔力が、アルトの心臓を締め付ける。

アルトは苦しくなりながらも、アダードの体を離そうとはしなかった。

「泣かないで。父様がきつとなんとかしてくれるわ」

王様はやっと落ち着きを取り戻し、杖を構えている兵士達にベギスを連れてくるそうしじをだした。

「どうして、私の娘が」

顔を両手でおおい、女王様は王様の胸に飛び込んで泣いた。

その夜、アルトはずっとアダードの側にいた。

アダードは時々苦しそうにもだえ、アルトの首を絞めようと何度も起き上がった。

そのたびに、アルトはアダードをだきしめ優しい言葉をかけた。

「大丈夫だから。だから：頑張つて。闇になんか心を奪われないで」

あちこちにひっかかれた傷ができながらも、アルトはアダードの側にいた。

深夜になり、ウィルと箒が部屋の隅で寝かけてたとき、ドアがゆっくりと開いた。

ウィルは箒をつついて起こした。

ベギスと王様。それに、泣いている女王様もいる。

「これしか方法はあるまい」

悔しげに、ベギスは唇を噛み締める。

「もう、無理なのですか？もっと、別な方法もあるんじゃない」

女王様が、ベギスの体を揺する。

「ここまでできたら……もう」

とベギス。

「話し合って決めたことじゃないか。国の事わ考えたら、こうするしかあるまい」

ベギスにしがみついている女王様を、王様は自分の元へと引き寄せながら言った。

寝ている二人を、ベギスは起こしてあげた。

アルトはあくびをし、目を覚ます。

隣で苦しそうに天井を見ているアダードを、ベギスは翼を広げ抱き抱えた。

ぐったりとしているアダードの瞳からは、涙がこぼれている。

「どこに連れて行くの？」

アルトの質問に、誰も答えようとはしない。

泣いている女王様と王様。

嫌な予感がしたアルトは、ベットからおりベギスの足をつかんだ。

「どこにも連れていかないで！！」

大声でアルトは叫んだ。

足にしがみついているアルトを、ベギスは見下ろした。

アルトの額に水が落ちてきた。

「もう手遅れなんだよ、アルト。ここまできたら、わしの力ではどうすることもできん」

ベギスも泣いていた。

もう片方の翼を広げ、開いている窓から、ベギスは外へと飛んで行った。

「わしらも行こう」

王様は女王様の体を支え、呪文を唱えた。

丸い円が二人の足下に広がり、光と同時に消えてしまった。

部屋に取り残されたアルトは、呆然とたっているだけだった。

「アダード…」

アルトは、こぼれそうな涙をふきとり、クローゼットにふりかえる。

何かおもいついたアルトは、クローゼットのドアを開け、服などをひっぱりだした。

「あった」

クローゼットのなかから出て来たのは、ほとんど使われていない箒だった。

アルトは箒にまたがると、窓へと向かって飛んだ。

「私達はどうすればいいの？」

展開についていけないウィルが、困ったように窓を見てつぶやく。

「過去ですから。かつてに映像は変わりますよ」

ルーの言うとおり、映像は森のなかへと変わった。

大木を囲んでいるグリム達が、祈をささげている。

「もう一人間にそまってしまったのですね」

グリムの長老が、ベギスに抱かれているアダードを見て悲しげに言

った。

「もっとはやくきづいていれば、こんな事にはならなかった」とベギス。

長老は大木の横にある土に手をつき、呪文の言葉を唱えた。

土が地面にめり込み、階段が姿をあらわした。

ベギスと、さきほどつい王様、女王様は階段へとおりていった。

女王様は魔法を杖にかけ、明かりを灯し奥へと進む。
アダードの激しい息遣いが、こだまのように響いている。

奥へ奥へと進むと、石でできたドアが前をふさいでいた。

「頼みます」

ベギスは一步後ろに下がり、女王様を前に行かせた。

光がついている氷の杖を、女王様は石のドアにむけて一振りした。

ドアは大きな音をたて、上へと持ち上げられた。

中は真っ白な空間でおおわれ、真ん中には一つだけ十字架が地面に刺さっているだけだった。

「わしが一人ではいろう。貴方達はこちらでまっけていてください」

「まっけて!!」

そのとき、やつとのことだどり着いたアルトが、箒に乗ったまま突っ込んできた。

徐々に箒を下におろし、アルトは着陸の体制にはいる。

だが、地面はヌルヌルしていたため、思い通りに着地ができず、そのまま滑り込むように顔面からこけてしまった。

女王様が、駆け寄ってくる。

頬をすりむいたアルトは、血を流しながらも、ベギスの元へと行くとした。

しかし、女王様がアルトの体を抱きしめ阻止する。

「お姉ちゃん……お姉ちゃん」

苦しげに、アダードはアルトへ手を伸ばす。

「お願い！ベギス。妹を連れていかないで！！」

アルトは女王様の腕のなかでもがきながら、泣き叫んだ。

けれど、ベギスはアルトの言葉など聞く耳をもたず、ドアのなかへとはいっていく。

「嫌だ…こんな所にはいりたくない。助けて！お姉ちゃん」

アダードの叫びに、アルトは女王様の腕にかみついた。

痛さで顔を歪め、女王様はアルトを離してしまった。

アルトはこけですべりながらも、アダードの元へと走った。

しかし、遅かった。

「アダード！」

ゴンツと音をたて、ドアは閉まってしまった。

中から、まだ姉を呼ぶアダードの声が聞こえる。

アルトは石のドアを叩いた。

「絶対…絶対、助けてあげるから。それまでまってアダード……」

ドアに額をつけ、アルトは泣きながら座り込んだ。

なぜか、ウィルの瞳からも涙があふれてきた。

「これが、アルト様の過去でございます。あれからベギス王が、村の皆に忘れ呪文をかけ、違う記憶をめぐりこんだのです。ですから、この話は古い昔話へと伝わってしまったのです」

ウィルは泣き崩れているアルトから、目を離す事ができなかった。

「どうして、あんなひどいことをしたの？」

「アダード様は、もう手遅れだったのです。しかし、殺すこともできない。ですから、王様は考えたのです。アダード様を封印しようと。国を守るため、しかたがないことだったのです」

「じゃあー、今の村の皆は嘘の記憶が思い出だとおもっているの？
ママも……」

「そう言う事になります。ですが、それが幸せへと繋がっているのです。問題なく、毎日に進んでいます。では、そろそろ戻りましょうか。元の世界へ」

フワッとウィルの体が浮かび上がり、大きな円のなかへと吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9824a/>

ラスト国～奪われし玉～

2010年10月17日05時29分発行